

No. 43

雑誌名	国立西洋美術館報
巻	43
ページ	1-53
発行年	2010-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1263/00000168/

国立西洋美術館報

ANNUAL BULLETIN OF
THE NATIONAL MUSEUM OF
WESTERN ART

No.
43

April 2008 — March 2009

ANNUAL BULLETIN OF
THE NATIONAL MUSEUM OF WESTERN ART
April 2008-March 2009

国立西洋美術館報

No. 43

ANNUAL BULLETIN OF
THE NATIONAL MUSEUM OF WESTERN ART
April 2008-March 2009

Contents

Foreword	6
by Masanori Aoyagi	
New Acquisitions	
Carlo Innocenzo Carlone, <i>Glorification of St. Felix and St. Adauctus</i>	9
by Mitsumasa Takanashi	
Vilhelm Hammershøi, <i>Interior with Ida Playing the Piano</i>	12
by Naoki Sato	
Exhibitions	
Corot <i>Souvenirs et variations</i>	16
by Megumi Jinguoka	
Vilhelm Hammershøi <i>The Poetry of Silence</i>	18
by Naoki Sato	
The Revolutions of the Classical Age	20
— European Painting of the 17th century from the Collection of the Louvre Museum	
by Akira Kofuku	
Fun with Collection	22
The Joy of Seeing and Knowing: Religion, Artists, and Conservation	
Restoration Record	24
by Kimio Kawaguchi	
Report on Conservation Science Activities	25
by Miho Takashima	
The Research Library	27
by Masako Kawaguchi	
Report on Educational Programs	30
by Yoko Terashima, Saki Yokoyama, Yuko Waragai	
FUN DAY 2008 Let's Enjoy all of the NMWA!!	39
by Saki Yokoyama	
OPEN museum	41
by Saki Yokoyama	
Touch the Museum (beta): Multimedia tour of the permanent collection	42
by Atsushi Shinfuji	
List of Loans	44
List of New Acquisitions	45
List of Guest Curators / Internship / Staff	49
Research Activities	50

目次

まえがき [青柳正規]	7
新収作品	
カルロ・インノチェンツォ・カルローネ《聖フェリックスと聖アダウトゥスの栄光》 [高梨光正]	9
ヴィルヘルム・ハンマースホイ《ピアノを弾く妻イーダのいる室内》 [佐藤直樹]	12
展覧会	
コロー 光と追憶の変奏曲 [陳岡めぐみ]	16
ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情 [佐藤直樹]	18
ルーヴル美術館展—17世紀ヨーロッパ絵画 [幸福 輝]	20
Fun with Collection 見る楽しみ・知る喜び—宗教・芸術家・修復編	22
修復記録 [河口公男]	24
保存科学に関わる活動報告 [高嶋美穂]	25
研究資料センター [川口雅子]	27
教育普及に関わる活動報告 [寺島洋子・横山佐紀・薬谷祐子]	30
FUN DAY 2008 セイビまるごとお楽しみ! [横山佐紀]	39
OPEN museum [横山佐紀]	41
Touch the Museum β —映像と音でめぐる常設展 [新藤 淳]	42
展覧会貸出作品一覧	44
新収作品一覧	45
客員研究員・インターンシップ・スタッフ一覧	49
研究活動	50

Foreword

This *Annual Bulletin* No.43 records the activities of the National Museum of Western Art, Tokyo (NMWA), during fiscal year 2008, namely from April 1, 2008, through March 31, 2009. The reports cover acquisitions, exhibitions, research, education, information sciences, and conservation department activities and their related materials.

On April 1, 2001, the NMWA joined the National Museum of Modern Art, Tokyo, and two other museums to form the Independent Administrative Institution National Art Museum. The first five-year "Midterm Plan" for this new entity ended on March 31, 2006, and fiscal year 2007 marked the third year of the second five-year "Midterm Plan" begun on April 1, 2006. When the NMWA joined the other two museums on April 1, 2001, to form the Independent Administrative Institution National Art Museum, there was an increase in its role as an independent agent rather than its previous role as a national institution, and there were great expectations that through activities suitable for an art museum the museum would become all the more broadly active and accessible. However, in fact, since its change to Independent Administrative Institution status, the museum has been subject to two systems of rules, those of the national system, and those of the Independent Administrative Institution format. Each year income has declined year-on-year by approximately 4 percent, and human resources expenses have also been reduced approximately 1 percent year-on-year. As a result, the museum must watch every expenditure, down to keeping its newspaper subscriptions to a minimum, and it is absolutely impossible to develop new projects in this current fiscal situation. Probably, the result of newspapers and other media implementing the "original sin theory" against Independent Administrative Institutions and tarring the National Art Museum, which is striving to develop and disseminate culture, with the same brush as all the other IAI.

In this sort of situation, the entire staff is employing every strategy at their disposal in order to not experience a lessening of the functions entrusted to the NMWA and a lowering of the quality of services to its visitors. Probably as a result, the actual number of visitors to the museum is increasing. Further, the Evaluation Committee for IAI established by MEXT has given NMWA an essentially appropriate evaluation for Fiscal 2008. However, the level of staff efforts is fast approaching its limits, and it has become harder to clearly detail the future form of the NMWA.

Today art museum activities in China, South Korea and the west are all under the spotlight, with new facilities, added wings and large-scale special exhibitions all catching the news. These activities seem to be in an inverse ratio to the situation in Japan. Each of those countries acknowledges the importance of art museum activities to their country's own cultural enrichment, and each has the byproduct of increasing the sense of their country's presence in international society. Conversely, in order to avoid the stagnation of art museum activities in Japan, we must hone our various strategies, even though long-term strategies are difficult during the continuing and constant trend towards lower budgets and human resource numbers.

It is our ongoing hope that we will receive the good opinions of all as we seek to break this stalemate of worsening circumstances and continue to develop museum activities that are powerful and effective.

March 2010

Masanori Aoyagi
Director-General, National Museum of Western Art, Tokyo

まえがき

本年報第43号は、平成20(2008)年度に関するものであり、平成20年4月1日から平成21年3月31日までの当国立西洋美術館が行なった、作品収集、展覧会、調査研究、教育普及、情報資料の収集・発信、保存修復などの事業もしくは分野における活動の報告、ならびに関連する資料や記録を収めている。

国立西洋美術館は、平成13年4月1日から東京国立近代美術館他2館とともに独立行政法人国立美術館の一単位となり、平成20年度は、平成18年4月1日から始まった第2次「中期計画」の3年目にあたる。平成13年4月1日から東京国立近代美術館他2館とともに独立行政法人国立美術館の一単位となったその時点では、国立の機関としてよりも自由度が増し、美術館にふさわしい活動がより活発にまた広汎にできるという期待に満ちていた。しかし実際に独立行政法人に移行してみると、国立としての規制と独立行政法人としての新たな規制との二重のしばりを受けるようになり、予算も毎年前年比4パーセント弱の減少となり、人件費も毎年約1パーセントの減少となった。その結果、現在では新聞購読さえ最小限に抑えねばならないほどになり、新規の事業を展開することなどまったく不可能となっている。おそらく、新聞等に報道されている独立行政法人の性悪説などが作用し、文化の普及と発展に努力している国立美術館も他の独立行政法人と十把一絡げに扱われているためであろう。

このような状況にあるものの、西洋美術館に託された業務の遂行や、来館者に対するサービスの質が劣化しないよう、職員一同さまざまな工夫を凝らしながら努力を重ねている。おそらくその効果が徐々に浸透しつつあるためであろう、来館される方々からは好意的な声がかなりの数寄せられており、来館者数も着実に増加している。また、文部科学省に設置された独立行政法人に関する評価委員会は平成20年度に関しても、おおむね適正との評価をくだしている。ただしこのような努力も限界に近づきつつあり、西洋美術館の将来像をはっきりと描くことさえむずかしくなっている。

中国や韓国だけでなく欧米でも美術館活動が脚光をあび、施設の新設や増改築だけでなく、大規模な企画展も頻繁に行なわれるようになり、日本の状況に反比例するかのような活況を呈している。それぞれの国々の文化的充実にとって美術館活動がいかに重要であるかが認識されているからであり、各国の存在感を国際社会においていっそう増大させるという副産物も生んでいる。相対的とはいえ日本における美術館活動の沈滞を防ぐために、われわれはさまざまな工夫を凝らしているが、人的にもまた予算の上でも恒常的な減少傾向が続く中では長期的な戦略さえむずかしくなりつつあるのである。

このような閉塞感をいかに打破し、活力のある美術館活動を継続的に展開するにはどうすればいいのか、是非多くの方々のご意見を頂きたいと希望する次第である。

平成22年3月

国立西洋美術館長
青柳正規



カルロ・インノチェンツォ・カルローネ [1686-1775]
《聖フェリックスと聖アダクトゥスの栄光》

1759-61年頃
油彩、カンヴァス
90×120 cm

Carlo Innocenzo Carlone [Scaria 1686 - Como 1775]
Glorification of St. Felix and St. Adactus

c.1759-61
Oil on canvas
90×120 cm
P.2008-0001

来歴 / Provenance: Private collection, Spain.

文献 / Literature: F. Lecchi, "Un elenco di abbozzi delle opere di Carlo Carlone" in *Arte Lombarda*, vol.X, 1965, p.128.

カルロ・インノチェンツォ・カルローネは1686年に、イタリア北部のロンバルディア地方のスカリアで、この地方を中心として活躍した画家一族に生まれ、1775年にコモでこの世を去る。彼は初めヴェネツィアの画家ジュリオ・クアッリョ2世(1668-1751)の下で修業し、ウディネなどで彼の助手を務める。その後1706年から11年にかけて、ローマに赴き、フランチェスコ・トレヴィザーニ(1656-1746)の工房に身を寄せ、アカデミア・ディ・サン・ルーカで絵画を学ぶ。このとき彼は17世紀後半のローマ派とナポリ派、とりわけピエトロ・ダ・コルトーナ、ルーカ・ジョルダノ、ソリメーナ、コッラード・ジャクイントらの様式を丹念に学んだ。その後ウィーンに赴き、マルカントニオ・キアリーニ(1652-1730)とともに、エウジェニオ・フランチェスコ・ディ・サヴォイア、通称プリンツ・オイゲンと呼ばれ、彼の夏の離宮として建設されたベルヴェデーレ宮殿のフレスコ装飾を手がける。その後、オーストリア、ドイツ各地で兄のストゥッコ装飾家ディエゴ・フランチェスコ(1674-1750)とともに、宮殿装飾を手がける。スペイン継承戦争をきっかけとしてイタリア北部に勢力を拡大したオーストリア帝国や、その他ドイツの諸宮廷でのイタリア風宮廷装飾推進の中

心となった画家である。

本作品は1759年から61年にかけて彼が手がけたガルダ湖畔のサン・フェリーチェ・デル・ベナーコの教区聖堂に描いた天井フレスコ画《聖フェリックスと聖アダクトゥスの栄光》の油彩下絵 (bozzetto) である。1997年にサザビーズの競売に出品された際には (Sotheby's London: Thursday, Dec. 4, 1997, lot.210)、主題は《三位一体と天使たち》となっていたが、その後対となる油彩下絵《聖フェリックスと聖アダクトゥスの殉教》との比較から、本作品がやはりサン・フェリーチェ聖堂天井画のボツェットであることが明らかとなった。¹⁾ これらの油彩下絵は、カルローネが没した後に息子のジャンバッティスタ・カルローネによって作成された、コモに残されていたカルローネの工房の財産目録に記録されており、本作品は以下のように記録されているフレスコ下絵に該当することは、主題および寸法から疑いの余地はない。すなわち、“S. Felice, e Compagno in gloria” (《聖フェリックスと仲間の栄光》)、寸法が縦 “1 Braz 6 onc.”、横 “2 Braz” となっている。²⁾ メートル法導入前のミラノブラッチョが59.49 cm、1オンチャはその1/12の4.95 cmとなることから、メートル法に換算すると、縦が89.2 cm、横が118.98 cmと、本作品の寸法にほぼ正確に合致する。

そもそもサン・フェリーチェ・デル・ベナーコ聖堂はプレーシャ出身のストゥッコ装飾家、建築家のジャコモ・アントニオ・コルベッリーニ (1674-1742) の設計で、16世紀の古い聖堂を取壊し、1740年から新たに建設が進められ、1781年に完成した。この聖堂は聖フェリックスと聖アダクトゥスと聖フラウヴィアに捧げられた教区聖堂で、その天井にカルローネは《聖フェリックスと聖アダクトゥスの栄光》、《聖フェリックスと聖アダクトゥスの殉教》を1759年から61年にかけて描いた。この聖人の伝説は、実のところ、9世紀にウィーン大司教を務めたアドが残した『殉教聖人録』に記されており、聖人たちの聖遺物は1361年からウィーンのザンクト・シュテファン大聖堂に保管されている。アドによると、紀元後303年8月30日、ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝の時代、法務官ドラクスの命でキリスト教徒フェリックスがセラピス神殿で捧げものを強要されたところ、セラピスの像が消え失せ、さらにメルクリウスの神殿で同じことをさせられた際にもたちまちに神像は消え失せ、さらにディアナ神殿で同じことをしたところ同じく神像が倒壊したという。³⁾ そのためドラクスはフェリックスの首を刎ね、このとき側にいたひとりの男が自分もキリスト教徒であることを告白したために、ドラクスはフェリックスとともにこの男の首も刎ねた。しかし名前が不詳であったため、あとからこの男に「更なる発展のために (ad auctus)」という意味のアダクトゥスという名前を付けたという。その後彼らが殉教したオスティア街道沿いの場所には祈りを捧げる人々が後を絶たず、のちに聖堂が建てられたという。⁴⁾

現在では、必ずしもこれら二聖人の伝説の真偽は定かではない。しかし、ウィーンのザンクト・シュテファン大聖堂に聖遺物が残されており、また9世紀のウィーン大司教アドが伝記を残している聖人を守護聖人として建てられたサン・フェリーチェ・デル・ベナーコ聖堂と、その聖人伝に基づいた天井画を描いたカルローネらの背景には、18世紀におけるこの地方でのオーストリア帝国の文化および政治的影響力の強さが如実に示されている。18世紀ヴェネツィアやローマの文化圏とは異なる、オーストリアとの交流、軋轢の中で

醸成されたロンバルディア地方独自の文化現象の一例として、本作品は非常に興味深い事実を背景に背負っている。

作品の状態に関して付言すると、カンヴァス地は非常に織の荒いものが用いられており、現在小麦粉糊を用いた裏打ちがされているものの、リタッチや亀裂の痕跡の状態からそれ以前は巻かれた状態で保管されていたものと考えられる。1999年にR.シェファードによる修復処置が行なわれ、古いニス除去、洗浄および亀裂や欠損部分が修復され、現在は安定した状態を保っている。

(高梨光正)

註

- 1) (exh.cat.) Carlo Carlone 1686-1775, *Der Ansbacher Auftrag*, Peter O. Krückmann (ed.), 1990, pp.74, 166-168.
- 2) F. Lechi, “Un elenco di abbozzi delle opere di Carlo Carlone”, in *Arte Lombarda*, vol.X, 1965, p.128.
- 3) Ado Viennensis Archiepiscopus, *Martyrologium*, “D. III. Kal. Septembris”, in Migne, *Matrologia Latina*, MPL123, pp.342-344.
- 4) *Ibid.*

Carlo Innocenzo Carlone was born in 1686 in Scaria, in the northern Italian Lombardy region. Born into a family of painters active primarily in this region, Carlone died in Como in 1775. At first he studied under the Venetian painter Giulio Quaglio II (1668-1751) and he is also known to have worked as an assistant at Udine (after 1700). Later, from 1706 to 1711 he lived in Rome, where he worked in the studio of Francesco Trevisani (1656-1746) and studied painting at the *Accademia di San Luca*. During his time in Rome, Carlone diligently studied the Roman and Neapolitan schools of the latter half of the 17th century, including the styles of Pietro da Cortona, Luca Giordano, Francesco Solimena, and Corrado Giaquinto. He later headed to Vienna, where along with Marcantonio Chiarini (1652-1730) he worked on the fresco decoration of the Bevedere Palace, which was built as a summer palace for Eugenio Francesco di Savoia, commonly known as Prinz Eugen. Later he worked on palace decoration in Austria and Germany, along with his stucco decoration artist older brother Diego Francesco (1674-1750). When the succession wars of Spain broke out, the Austrian Empire expanded its power over the northern section of Italy and embarked on numerous building programs. Carlone was a painter for palaces both in the Austrian Empire and in German courts, and is known as a main proponent of the Italian palace decorative style.

This work was created as a *bozzetto* oil preparatory painting for the *Glorification of St. Felix and St. Adactus* ceiling fresco that Carlone painted between 1759 and 1761 at the parish church of San Felice del Benaco on the shore of Lake Garda. When this work appeared at auction in Sotheby's London (Thursday Dec. 4, 1997, lot 210) the subject was named as *Trinity and Angels*, but later comparison with a pendant *bozzetto*, *Martyrdom of St. Felix and St. Adactus* clarified that this was indeed the *bozzetto* for the ceiling painting of San Felice.¹⁾ These *bozzetti* were listed in the inventory of the Carlone studio in Como compiled by his son Giambattista Carlone after Carlone's death. Given the following record of the *bozzetti* in the assets catalogue, clearly there is no room for doubt that the NMWA is one of the pair, given their subject matter and measurements. The catalogue states: subject of “S. Felice, e Compagno in gloria”, and height equals “1 Braz 6 onc.” and width equals “2 Braz.”²⁾ The Milanese *braccio* was a pre-metric measurement that measured approximately 59.49 cm, while an *oncia* was 1/12 of a *braccio* at 4.95 cm. Translated into metric measurements, this means the height was 89.2 cm and the width 118.98 cm,

approximately the exact measurements of this work.

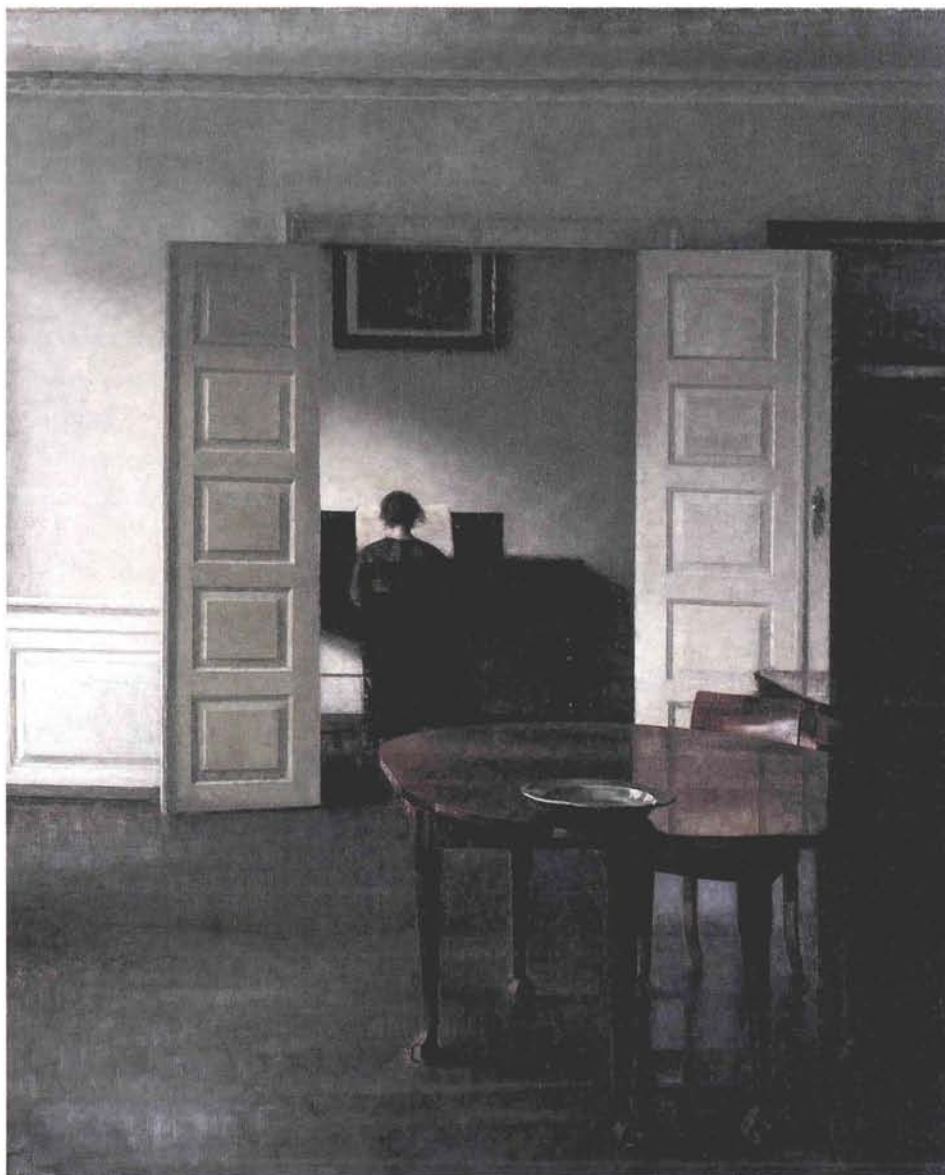
The San Felice del Benaco church was the work of Giacomo Antonio Corbellini (1674-1742), a stucco artist and architect from Brescia, and it was built to replace a 16th century church. Work progressed on the new structure from 1740 onwards and it was completed in 1781. San Felice was the diocesan church dedicated to St. Felice, St. Adauctus and St. Flavia, and Carlone decorated its ceiling with the *Martyrdom of St. Felix and St. Adauctus* and of *St. Felix and St. Adauctus in Glory* from 1759 to 1761. The legends of the saints St. Felix and St. Adauctus, in fact, are recorded in the *Martyrologium* of Ado Viennensis, the archbishop of Vienna in the 9th century. The relics of these saints were enshrined in 1361 in Vienna's St. Stephan Cathedral. According to Ado, on the 30th day of the 8th month of 303, during the reigns of Emperors Diocletian and Maximian, when the praefector Dracus ordered the Christian Felix to make the sacrifice at the Serapis temple, the statue of the deity disappeared in air. Similarly, when the same was carried out at the Mercury temple, the statue of the deity shattered and collapsed, and again at the temple of Diana.³⁾ Dracus ordered Felix beheaded, and because the person standing next to him during his beheading also confessed to being a Christian, he too was beheaded. However, because the name of this person was not known, he was named as "*adauctus*", literally "for more development", which then became his name Adauctus. There was then an endless gathering of people making offerings and prayers at the spot where the martyrdom took place along the Via Ostiense, and finally a church was built on the spot.⁴⁾

Today it is not clear whether or not this legend of the two saints was based on a real occurrence. However, it is true that relics remain at the church of St. Stephan in Vienna, the legend was recorded in Ado's 9th century records, and San Felice del Benaco was built with these saints as its patron saints. Carlone painted this ceiling painting based on the martyrdom legend. All of these factors speak of the cultural and political power of the Austrian Empire over this region during the 18th century. This painting has as its background the extremely fascinating fact that it is one example of the unique regional cultural phenomena of the Lombardy region that was fostered by its interactions with Austria, and quite unlike the cultural spheres of 18th century Venice or Rome.

In terms of the work's current condition, the painting was painted on extremely roughly woven canvas and today the lining with flour paste remains. Judging from the retouching and crackling traces, the work is thought to have been rolled at some point. R. Shepherd carried out conservation work in 1999, when old varnish was removed, the painting was washed, and cracks and missing areas were repaired. Today the painting is in stable condition. (Mitsumasa Takanashi)

Note

- 1) (exh. cat.) *Carlo Carlone 1686-1775. Der Ansbacher Auftrag*, Peter O. Krückmann (ed.), 1990, pp.74, 166-168.
- 2) F. Lechi, "Un elenco di abbozzi delle opere di Carlo Carloni", in *Arte Lombarda*, vol.X, 1965, p.128.
- 3) Ado Viennensis Archiepiscopus, *Martyrologium*, "D. III. Kal. Septembris", in Migne, *Patrologia Latina*, MPL123, pp.342-344.
- 4) *Ibid.*



ヴィルヘルム・ハンマースホイ[1864-1916]
《ピアノを弾く妻イダのいる室内》

1910年
油彩、カンヴァス
76×61.5 cm
画面右下に記名VH

Vilhelm Hammershøi [Copenhagen 1864 - Copenhagen 1916]

Interior with Ida Playing the Piano

1910
Oil on canvas
76×61.5 cm
Signed lower right with monogram VH
P.2008-0003

来歴 / Provenance: Mr Alexander Maitland, Edinburgh; Admiral Sir Nigel and Lady Henderson; Swedish private collector.

展覧会歴 / Exhibition: Vilhelm Hammershøi, Nationalmuseum Stockholm, 18. Feb. - 07. May 2000 (カタログ外、追加作品として展示).

文献 / Literature: Alfred Bramsen and Michaëlis Sophus, *Vilhelm Hammershøi. Kunstneren og hans værk*, Copenhagen 1918, under the year 1910 no.336, p.109; Paul Vad, *Hammershøi and Danish Art at the Turn of the Century*, trans. by Kenneth Tindall, New Haven and London, 1992, ill. p.335; *Vilhelm Hammershøi, exh.-cat.* Göteborgs Konstmuseum, Nationalmuseum Stockholm, 2000, pp.140-143.

ヴィルヘルム・ハンマースホイは、デンマーク19世紀末を代表する象徴派の画家として、近年、再び評価が高まっている。没後、デンマーク本国においても忘れ去られてしまうが、生前にはドイツ、フランス、イタリアとヨーロッパの国際展で次々と高い評価を得た画家であった。以下に、当時の名声の例を挙げてみよう。ロダンの秘書をしていたライナー・リルケは、ハンマースホイに会うためにわざわざコペンハーゲンを訪れた。ハンマースホイは、リルケがロダン以外で唯一、芸術論を書くに値する画家であると高く評価する。しか

し、残念ながら、リルケによってハンマースホイ論が着手されることはなかった。このことでリルケは、ハンマースホイを紹介してくれた美術史家のカール・マスンにあてた謝罪の手紙を残している。また、フランスの批評家テオドール・デュレは1890年にコペンハーゲンを訪れ、ハンマースホイの作品を高く評価したことがある(Vad, pp.82-85)。ドイツではベルリンのパウル・カッシーラー画廊がハンマースホイの作品を求めて、コペンハーゲンで少なくとも2点の作品を購入したことが知られている(Bramsen, nr.270, 280)。1905年には、ベルリンのシュルテ画廊で個展が開かれ、1911年にはローマの国際美術展でクリムトらと並んで一等賞を獲得するなど、デンマークの画家として先例がないほどに名声を極めることとなった。ウフィツイ美術館はそうした業績から、晩年のハンマースホイに自画像を依頼する。ハンマースホイの没後、妻イーダによってようやく寄贈された自画像は現在も同館の肖像画コレクションに収められている。

しかし、ハンマースホイの名声は前衛芸術の台頭とともに急速に忘れられていく。ハンマースホイのコレクターであり、377点を網羅した作品カタログを1918年に出版したアルフレズ・ブラムスは、1917年、自らが所有する28点の作品を国立美術館に寄託する契約を結び、それらの作品は通称「ハンマースホイ・ホール」とよばれる贅沢なスペースで展示されていた(Bramsen, p.76)。しかし、1931年には展示スペースの不足を理由に、すべての作品がブラムスに返却されるという事態が起こる。再評価の兆しは、1981年のオードロブゴエ美術館での回顧展まで待たなければならない。ようやく1987年になって、返却されたブラムスの作品28点のうち6点が再び国立美術館に戻されることとなった(Vad, p.93)。その後は1997-98年のオルセー美術館およびグッゲンハイム美術館での巡回展により、ハンマースホイの画業が国際的舞台に再び返り咲き、1999-2000年にはイェーテボリ国立美術館とストックホルム国立美術館、2003年にはハンブルク美術館と展覧会を重ね、ハンマースホイ作品の市場価格も劇的に高まっていった。そして、2008年に国立西洋美術館は日本で初めての回顧展をロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツと共催し、日本でもこの画家に注目が集まることとなった。

ハンマースホイが描いた作品の中で、最も愛されているのは室内画であろう。19世紀末に活動したアンナ・アンカーやピーダ・イルステズ、カール・ホルスウーらに代表されるいわゆるデンマークの室内画派たちが、明るい光に溢れた親密な雰囲気のある室内を描いていたのに対し、ハンマースホイはモノトーンと見まごうほどの淡い色調で室内の情景を崇高に表現し続けた。その大部分がコペンハーゲン、ストランゲゼ30番地にある自分のアパートの室内であり、妻のイーダが登場人物として頻りに描かれている。しかし、そのほとんどが後姿であり、鑑賞者は彼女の表情を窺い知ることができない。室内の表現も、何らかの物語を示唆するようなモチーフが極力排除されているため、鑑賞者が作品解釈の糸口を見つける可能性も制限されている。そうした表現から、ハンマースホイの作品はしばしば「語られることのない物語」と称されてきた。

本作品は、ハンマースホイが1910年にプレズゲーゼ25番地に引越した年に描かれたものである。夫妻は、3年後の1913年に、かつて住んでいたストランゲゼ30番地の向いにあるストランゲゼ25番地に再び引越すため、プレズゲーゼの室内を描いた作品は少な

い。本作品に描かれているのは、白い大きな扉でつながれた二つ続きの部屋である。白い扉は我々に向かって開け放たれ、左手から射す外光が室内を劇的に照らし、奥の部屋では妻イーダが我々に背を向けてピアノの前に座っている。その後姿から、彼女がピアノを弾いているのかどうかは定かではない。しかし、両開きの扉が我々に向かって開けられているために、ピアノの音色が画面から流れて出てくるかのような効果を生み出している。また、妻イーダの後姿は、フェルメールやエマニエル・デ・ウィッテなどの17世紀オランダ黄金期の室内画を思わせることから、ハンマースホイが古典画に取材していることも見て取れる。イーダの頭上には銅版画と思しき額絵が掛けられているが、そこに何が表わされているかはわからないため、オランダ黄金期の絵画とは異なり、鑑賞者はこの絵の解釈の手がかりを見つけないことができない。同様に、前景には一脚の椅子と楕円形の食卓が描かれているが、その上に載せられた銀皿が無機質な表情で我々鑑賞者の解釈を冷たく拒絶しているようでもある。テーブルの右後方には四角いテーブル、さらにその向こうには何も入っていない本棚、その上には風景版画と思しき額絵がもう1点掛けられている。同じ年に描かれた《画家のイーゼル》(コペンハーゲン国立美術館)では、これと同じ版画がより鮮明に表わされており、この版画がC.A.ロレンツェンの絵画《4月1日、コペンハーゲンの闘い》に基づくJ.F.クレメンスの銅版画であることが確認されている(Exh.-cat. Copenhagen / Paris / New York 1997-98, no.68, p.176)。画面全体に何らかの意味を与えているとは思われない。こうした冷たい表情を見せる家具や不鮮明な額絵モチーフは、ハンマースホイの全作品に共通の造形語彙で、作品ごとに配置を換え、何度も繰り返し登場する。それはまるで、舞台装置のように生活感を伴わない「しつらえ」でしかなく、かろうじて室内を満たす自然光が、人が生活する空間であることをほのめかしてくるのである。

プレズゲーゼに住んでいた3年間に描かれた室内画は、どれも完成度が高く、ハンマースホイの後期を代表する室内画として高く評価されている。ブラムスのカタログによると、1910年から11年にかけてハンマースホイは、15点の室内画を描いており、そのほとんどがこの2室をモチーフとしている。カンヴァスの寸法はストランゲゼ30番地での室内画と比べて大きくなっているのは、新居の天井が以前よりも高くなったことと関係していよう。そしてそれら同時期の室内画は、どれも青灰色の繊細な諧調で画面が支配されている。そのうち、白い扉が画面中央を占め、なおかつイーダが表わされているものとなると1911年の《室内、プレズゲーゼ25番地》(アロス・オーフス美術館)、あるいは《本を読むイーダ》(ストックホルム国立美術館)の2点が本作品の比較作品となるだろう。オーフス作品(fig.1)は、本作品よりも白い扉に向かってクローズアップした構図となっている。蓋の閉じられたピアノに手をかけてたたずむイーダは、こちらを向いて微笑む。彼女が幸福そうに描かれた珍しい作品のひとつである。ピアノの上には、引越前のストランゲゼ30番地の住居でも何度か描かれたロイヤル・コペンハーゲン製のパンチ・ボウルが置かれているが、本来見られるはずの青絵付けはここでは省略されている。ピアノの前に置かれた椅子の脚が3本だけしか見えないのもハンマースホイの特徴的な表現である。ストックホルム作品(fig.2)は、一層クローズアップされた構図となり、前



fig.1 ハンマースホイ《室内、ブレジゲゼ25番地》1911年、油彩・カンヴァス、74×69 cm、アロス・オーフス美術館
Hammershøi, *Interior, Bredgade 25*, 1911, oil on canvas, 74×69 cm, ARoS Aarhus Kunstmuseum, Aarhus



fig.2 ハンマースホイ《本を読むイータ》1911年、油彩・カンヴァス、73×61 cm、ストックホルム国立美術館
Hammershøi, *Interior with a Woman Reading*, 1911, oil on canvas, 73×61 cm, Nationalmuseum, Stockholm

れている。

本作品の購入によって、2008年度にロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツと国立西洋美術館で開催されたハンマースホイ展に、後期作品の白眉を加えることができただけでなく、本館のシャヴァンヌやカリエールといったフランス象徴派のコレクションの幅を広げることが可能となった。また、1920年代のローランやヴュイヤーによるフランス室内画との比較展示によって、鑑賞者に近代美術における北欧の一例を提供する大きな役割を果たすことであろう。

(佐藤直樹)

景の部屋で立ったまま本を読むイータが描かれている。ハンマースホイが、フェルメールの《手紙を読む青衣の女性》(アムステルダム国立美術館)を手本として描いた《手紙を読む女性のいる室内》(1899/1900年、個人蔵)から10年以上経てもなお自作の旧主題を繰り返していることが興味深い。どちらの作品も質が高いが、ブラムスのレゾネに図版が掲載されているのは西美作品のみであることから、当時本作品の評判が高かったことが窺える。

ロンドンの修復家による2007年5月の調査報告によると、本作品の状態は極めて良好とある。また、一点の加筆もなく、裏打ちも施されていない。同じ修復家によって同年3月には、ワニスの除去が行なわれ、当時の輝きが戻された。来歴に関しては、ブラムスによると、1910年にコペンハーゲンの芸術協会が本作品を購入していることがわかる。ただし、この購入は、展覧会開催後の買い上げ作品ではなく、芸術協会が例年行っていた会員の頒布会に供されるためであった。会費を納める会員は、年に一度の頒布会でのくじ引きにより作品が当たるシステムであった。現在の芸術協会にこの頒布会の記録は残っておらず、残念なことに詳細は不明である。その後、本作品の行方は一時わからなくなる。1916年に同芸術協会で開かれたハンマースホイ没後の回顧展では275点もの作品が展示されたが、カタログを見ると本作品は展示されていない。本作品が再び公の場で展示されるのは2000年のイエーテボリ/ストックホルムでのハンマースホイ展であった。このときは、展覧会中にスウェーデンの所蔵者が展示を提案したことによる予想外の追加作品であったためカタログに図版が掲載されることはなかったものの、別刷りで印刷された一葉がカタログに差し込まれた。

作品に添ってきた額縁は、裏板にエジンバラの額縁商のラベルが付けられていることから、エジンバラの個人コレクション期に作られたようだ。カンヴァスの木枠は明らかにオリジナルで、十分に堅固である。また、ハンマースホイは少数ではあるが自作の油彩画をもとに素描を残すことがあり、本作品の素描も個人蔵で1点確認さ

Vilhelm Hammershøi was a major symbolist painter in Denmark during the 19th century who has undergone a recent reevaluation by the art world. After his death Hammershøi was largely forgotten both in and out of Denmark, but during his lifetime he was highly regarded at international exhibitions held in Germany, France, and Italy, attaining an international renown. The following are examples of his acknowledgement by some of the famous people of the day. Reiner Maria Rilke, Rodin's secretary, traveled all the way to Copenhagen to meet Hammershøi. Other than Rodin, Hammershøi was the only painter Rilke valued enough to write about in an art treatise. However, unfortunately, Rilke never had the opportunity to write his Hammershøi thesis; an apologetic letter from Rilke to art historian Karl Madsen, who introduced Rilke to Hammershøi, ended the matter. The French critic Théodore Duret visited Copenhagen in 1890 and highly praised Hammershøi's work (Vad, pp.82-85). The Paul Cassirer gallery in Berlin sought works by Hammershøi and is known to have, at the very least, bought two of Hammershøi's works in Copenhagen (Bramsen, nr.270, 280). In 1905, the Eduard Schulte gallery in Berlin held a solo show of Hammershøi's works. In 1911, Hammershøi received a first prize, alongside Gustav Klimt, in the Roman Internationale. These and other accomplishments were unprecedented for a Danish painter. Based on these accomplishments, the Uffizi requested a Hammershøi self-portrait in his late years. After Hammershøi's death, his widow Ida finally presented the requested self-portrait, which today remains in the Uffizi's portrait collection.

However, Hammershøi's fame was quickly forgotten with the rise of avant-garde arts. Alfred Bramsen, a collector of Hammershøi works and author of the catalogue raisonné published in 1918 that included 377 works, contracted with the National Museum to donate the 28 works in his collection, and these works were displayed in a luxurious space known as Hammershøi Hall (Bramsen, p.76). However, citing lack of display space, all of these works were returned to Bramsen in 1931. The reevaluation of Hammershøi would have to wait until 1981, when Ordrupgaard held a retrospective of his works. In 1987, six of the 28 works given back to Bramsen were returned to the National Museum (Vad, p.93). Later, Hammershøi once again entered the international

stage with the traveling exhibition held at the Musée d'Orsay and the Guggenheim in 1997-98. In 1999-2000 the Konstmuseum Göteborg and the Nationalmuseum Stockholm held exhibitions, followed in 2003 by an exhibition at the Hamburger Kunsthalle, all contributing dramatically to the market price of Hammershøi's works. In 2008, the NMWA in concert with the Royal Academy, London, held Japan's first retrospective exhibition of Hammershøi's works, focusing Japan's attention on this artist.

Probably Hammershøi's most loved works are his interiors. The Danish interior painters active at the end of the 19th century, such as Anna Anker, Peter Ilsted and Carl Holsoe, painted interiors flooded with bright light and a sense of intimacy, while, on the other hand, Hammershøi painted subdued interiors, to the point of monotone, with an exalted sense of emotional setting. The majority of Hammershøi's works are images of his own apartment at Strangade 30 in Copenhagen, and the one person who frequently appears in these scenes is Hammershøi's wife, Ida. However, the majority of the images of Ida are back views, and thus the viewer is not privy to her emotions or facial expressions. The interior expression itself is also stripped of all narrative elements, giving viewers only a limited clue as to a work's interpretation. Given these factors, Hammershøi's works are often called "stories that are not told".

This painting was painted in 1910, the year that Hammershøi moved from Strangade 30 to Bredgade 25. Three years later, in 1913, the couple moved again to Strangade 25, across the street from where they had lived at Strangade 30, and there were only a few paintings created of the Bredgade interior. This painting features two Bredgade rooms connected by a large white door. The white door stands open towards the viewer, while light shines in dramatically from the exterior to the left. Hammershøi's wife Ida sits at a piano in the far room, with her back to the viewer. Given the back view it is hard to determine if Ida is playing the piano or not. However, because the door is open towards the viewer, we can imagine the effect of the piano music flowing out of the composition. Further, the back views of Ida are reminiscent of Dutch 17th century Golden Age painters such as Vermeer and Emanuel de Witte, and it seems that Hammershøi was drawing on classical works for his compositions. What appears to be a framed etching hangs over Ida's head, but the subject of the framed image is indecipherable. Thus, unlike the Dutch Golden Age images filled with subject matter hints, here Hammershøi does not provide interpretive hints for his viewers. Similarly, a single chair and an oval table are seen in the foreground, but the silver dish placed on the table confounds the viewer's interpretation with its simple inorganic form. A square table can be seen to the right back of the oval table, which in turn stands in front of empty bookcases. The framed work, which appears to be a landscape image, hangs above the bookcases. *The Artist's Easel* (Statens Museum for Kunst, Copenhagen) was painted the same year, and it provides a clearer rendering of the print on the wall. Judging from that painting, the print was J. F. Clemen's engraving of C. A. Loerntzen's painting, *The Battle of Copenhagen* (Exh. cat. Copenhagen / Paris / New York 1997-98, no.68, p.176), but it does not seem to have had any particular meaning in terms of the composition overall. Motifs such as furniture with its inorganic expression and unidentifiable framed pictures are visual vocabulary shared across Hammershøi's works, with their positions changed canvas by canvas, each reappearing numerous times. These stage prop-like "fittings" do not add a sense of everyday life to the scene, and it is only the natural light that fills the rooms that give a sense that they are spaces for human life.

The interiors painted by Hammershøi during the three years he lived at Bredgade are highly esteemed as representative of Hammershøi's later period. According to Bramsen's catalogue, Hammershøi painted 15 interiors during the years 1910 to 1911, with the majority of them on the motif of these two rooms. The canvases for these works are larger than those for the interior scenes painted at Strangade 30, and this could have to do with the fact that the new apartment had higher ceilings. These interiors from the same time period all have compositions made

up of finely graded bluish gray tones. Within the group, there are two that can be compared to this work, each with the white door in the center of the composition and a depiction of Ida. These two works are the *Interior Bredgade 25* (ARoS Aarhus Kunstmuseum) and *Interior with a Woman Reading* (Nationalmuseum, Stockholm). The Aarhus work (fig.1), moreso than the NMWA work, is a closeup of the scene beyond the white door. The piano has its lid shut and Ida stands with one hand on the piano, facing the viewer and gently smiling. This is a rare work showing her in a happy mood. A Royal Copenhagen punch bowl, frequently depicted prior to their move from Strangade 30, appears on top of the piano, and yet here the expected underglaze blue decoration is omitted from the bowl. Only three of the four legs of the chair placed before the piano can be seen, and this is a distinctively Hammershøi depiction. The Stockholm work (fig.2) shows an all the closer close up view, with Ida standing reading a book in the foreground room. It is fascinating to note that this marks Hammershøi repeating an old subject of his own from a decade before, *Interior with a Woman Reading* (1899/1900, private collection), which in turn was based on Vermeer's *Woman Reading a Letter*. While both the Aarhus and Stockholm works are of high quality, it is only the NMWA work that is reproduced in a plate in Bramsen's catalogue raisonné, suggesting that at the time this work was highly regarded.

According to the survey report of May 2007 by a London conservator, this work is in extremely good condition. Further, there is not a single stroke of added brushwork, and there is no backing attached to the work. The same London conservator removed the varnish in March 2007, returning the original sparkle to the work. The provenance of this work, according to Bramsen, states that in 1910 the work was purchased by the Kunstforeningen of Copenhagen. However, that purchase was not the case of a painting purchased after an exhibition has closed, but rather appears to have been a purchase by the distribution society that was related to an annual event. The members who paid their membership fees were allowed to participate in an annual drawing and the system allocated paintings for purchase. Unfortunately, while this group is still extant, the records of their distribution society are not extant, and thus the details of this matter are not known. The whereabouts of the painting after that time are unknown. The same group held a posthumous retrospective of Hammershøi's work in 1916, and there were a total of 275 works displayed. Examination of the catalogue, however, indicates that this work was not displayed. This painting first reappeared in public at the Hammershøi exhibition held at Göteborg and Stockholm in 2000. The work was in a Swedish private collection at that time and as it was a late addition to the show, it was not included in the exhibition catalogue. A separately printed image of the work, however was distributed with the catalogue.

The label on the back edge of the frame is that of an Edinburgh framer, and it seems to have been made when the work was in a private collection in Edinburgh. The stretchers for the canvas are clearly the originals and quite stable. Further, while only a few exist, Hammershøi did create drawings of his own oil paintings, and one drawing of this work can be confirmed today in a private collection.

The purchase of this painting not only allowed us to include one of Hammershøi's late great works in the exhibition held in fiscal 2008 in the Royal Academy, London, and at the NMWA, it also broadened the collection of French and European symbolists in the NMWA, such as the museum's Puvis de Chavanne, and Carrière. Further, the comparison of this work with the 1920s works of Ernest Laurent and Édouard Vuillard, reveal one example of the major role played by northern Europe in modern art.

(Naoki Sato)

展覧会 Exhibitions

コロー 光と追憶の変奏曲
Corot Souvenirs et variations

会期: 2008年6月14日 - 8月31日
主催: 国立西洋美術館 / 読売新聞東京本社 / NHK
入場者数: 286,173人

Duration: 14 June - 31 August 2008
Organizers: National Museum of Western Art / The Yomiuri Shimbun / NHK
Number of visitors: 286,173



バルビゾン派の展覧会にしばしば顔を出すコローだが、意外なことに、彼を中心にすえた展覧会が開かれる機会はそう多くはない。ルーヴル美術館の協力を得て、初期から晩年までの作品を集大成した今回のコロー展は、質的にも量的にも久しぶりの本格的な回顧展となった。また国際的にも最初の試みとして、印象派からキュビストまでコローの芸術に深い影響を受けた画家たちの作品をあわせて展覧し、この画家と19、20世紀芸術の接点の再検討を試みた。

コローという誰もが想起するのが、霽がかった夢想的な風景にニンフが舞い踊るといった作品だろう。しかし古典的伝統の中で画家修業を始めた若き日のコローはイタリアで戸外制作に励み、率直な表現が際立つ油彩習作群を残した。最初のセクションでは、イタリア各地で描かれた風景画や人物画を中心に、師の作品などもあわせて初期作品を紹介した。その後もコローは生涯を通じてフランス各地を旅し数々の優れた都市風景や田園風景を生み出していく。続くふたつのセクションでは、鋭敏なリアリズムの感覚と抜群の造形力によって革新をもたらしたその風景画の多彩な魅力を展望した。一方、コローが研究や個人的な楽しみのために手がけていた人物画も今日、高く評価されている。風景画に続き、彫塑的な表現と確固たる存在感をもつ人物画の数々を紹介するセクションも設けた。晩年に向かうにつれコローはかつて旅した土地を追想し、アトリエで再構成した多くの詩的な風景画を残した。最後のセクションにはこのコロー独特の絵画ジャンルを集め、展覧会をしめくくこととした。

展覧会の見所としては、ルーヴル美術館が所蔵するコローの代表作、《モルトフォンテーヌの思い出》、《青い服の婦人》、《真珠の女》が顔をそろえたことが挙げられる。とくに《真珠の女》は日本初公開となり、多数の熱心な来館者を集めた。これらの作品をはじめルーヴル美術館所蔵品を核に、欧米各国や日本国内の美術館、個人コレクションなど約60カ所の所蔵先から総数118点に及ぶコロー

とそのほかの画家の作品を集め、コローの全体像を描き出すことができた。またモネやシスレー、ルノワール、ドラン、ブラック、ピカソらとの比較展示は、コロー芸術が内包する近代性を示すとともに、これらの画家たちの作品の新たな魅力の発見にもつながった。本展を出発点としつつ、この若い世代への影響というテーマに焦点をあてて作品を拡充したコロー展が、その後、ランスとヴェローナを巡回したことは特記しておくべきだろう。

本展には多くの来館者が訪れ、専門家、一般の美術愛好家の双方から好評価を得た。一方、一部の作品の照明方法については来館者から厳しい意見も寄せられ、美術館の展示に対する一般の来館者の関心の高まりをあらためて実感する機会となった。作品の構造や展示環境の諸条件から限界があることはやむを得ない事実だが、こうした指摘を今後の工夫につなげていければと思う。

(陳岡めぐみ)

〔カタログ〕

編集: 陳岡めぐみ
制作: 美術出版デザインセンター

作品輸送・展示: ヤマトロジスティクス
会場設営: 東京スタジオ

Corot's works appear frequently in Barbizon School exhibitions, but only rarely is he the focus of exhibitions himself. Thanks to the cooperation of the Louvre Museum, this Corot exhibition was a truly substantial retrospective exhibition that covered his entire oeuvre, from earliest days to his final period. The exhibition also featured works by painters, from Impressionists to Cubists, who were deeply influenced by Corot. Overall the exhibition was a reexamination of the conjunction of this painter and the 19th-20th centuries.

Mention Corot and it is likely that most people will remember his



dream-like misty landscapes and dancing nymphs. However, the young Corot, who began his painting studies in the classical tradition, strove in his efforts to create plein-air works in Italy and he left a number of oil sketches characterized by the direct expression of their subjects. The first section of this exhibition introduced these early period works, along with those of his teachers. Later, Corot traveled throughout his life, visiting the far-flung French regions creating many superb urban landscapes and rural landscapes. The second section exhibited the diverse appeal of the landscapes that Corot created through realist sentiments and superior depictive skills. On the other hand, Corot's experiments with figural paintings for his own study and pleasure are today also highly praised. Continuing on from landscapes, several figure paintings with sculptural expression and a firm sense of presence were also introduced in this section. In his later years, Corot remembered the sites of his travels and left many poetic landscapes that he recreated in his studio. The final section explored this uniquely Corot genre.

The highlight of the exhibition was the lineup of masterpieces from the Louvre, *Recollection of Mortefontaine*, *Woman in Blue* and *Woman with the Pearl*. In particular, this was the first Japanese showing of *Woman with the Pearl* and it brought quite a number of diligent art viewers to the exhibition. With these three works and other Louvre works as its core, the exhibition presented an image of Corot in his entirety through an assembly of a total of 118 works by Corot and other painters from some 60 different collections, both private and public, from both Japan and throughout Europe and America. The comparative display of Corot alongside works by Monet, Sisley, Renoir, Derain, Braque, and Picasso revealed the modernity in Corot's arts and also made viewers discover new aspects of these paintings by other artists. It should also be noted that with this exhibition as its starting point, an exhibition of Corot, which focused on the theme of his influence on the younger generation, toured Reims and Verona.

The Tokyo exhibition attracted a large audience, and was well received by the whole gamut of visitors from specialists to general art lovers. On the other hand, visitors were sharply critical of the

lighting methods on some works, and it was an opportunity to once again experience the high regard of general visitors for art museum displays. Given the immutable limitations and factors involved in a display environment, we must somehow link these indications from the audience to our future handling of such matters. (Megumi Jingaoka)

[Catalogue]

Edited by: Megumi Jingaoka

Produced by: Bijutsu Shuppan Design Center

Transport and handling: Yamato Logistics Co., Ltd.

Exhibition design: Tokyo Studio



ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情

Vilhelm Hammershøi The Poetry of Silence

会期：2008年9月30日 - 12月7日

主催：国立西洋美術館 / 日本経済新聞社 / ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ

入場者：179,556人

Duration: 30 September - 7 December 2008

Organizers: National Museum of Western Art / Nikkei Inc. / Royal Academy of Arts, London

Number of visitors: 179,556



本展覧会は、19世紀末デンマークを代表する画家ヴィルヘルム・ハンマースホイ(1864-1916)の日本で初めて開催された回顧展である。ハンマースホイは、コペンハーゲンの王立美術アカデミーで学んだ後、仲間と「自由展」という分離派組織を設立、アカデミーとは一線を画する活動によって生前にヨーロッパで高い評価を得ていた。その名は、日本ではまだ知られていないが、北欧の象徴主義美術を代表する最も重要な作家のひとりであり、当時、ロダンの秘書をしていたリルケが、わざわざ彼に会うためにコペンハーゲンを訪れたほどであった。没後、彼の名前は抽象表現主義の台頭とともに急速に忘れ去られていくが、1997-98年のパリ、オルセー美術館とニューヨークのグッゲンハイム美術館での回顧展によって再び注目される。2003年にはハンブルク美術館でハンマースホイ展が開催され開館以来の入場者数を記録し、この作家の高まる人気を示すこととなった。本展は、ハンブルク展を監修したフェリックス・クレマーと、佐藤直樹がオードロブゴー美術館長アネ＝ビアギデ・フォンスマークの協力を得て組織されたものである。

本展は、ハンマースホイが最も多く描いたモチーフ「室内画」を中心に構成される。17世紀オランダ絵画に強い影響を受けたハンマースホイの作風は、フェルメールを思わせる静謐で時代錯誤的な室内表現を特徴とし、自宅を舞台に、妻のイーダのメランコリックな後姿が繰り返し描かれた。鑑賞者に背を向ける彼女は、鑑賞者を心理的に画中へと導く役割を果たし、鑑賞者である我々はこの夫婦の居室の目撃者となる。こうしたモチーフは、ドイツ・ロマン派の巨匠C.D.フリードリヒの系譜に連なるものだが、ハンマースホイの作品で鑑賞者はイーダの後姿によって画中に導入されつつも、同時にその背中で拒絶される招かざる客人のような不安感も覚える。とは言え、ハンマースホイの作品が居心地悪いわけでは決していない。そういう不安感を抱きつつも、音のない世界に包まれるような、見る者を惹き付けてやまない静謐な絵画空間が作り出されているからだろう。このような、オランダ風の写実主義とロマン主義的な情感溢れる要素の融合の中に、ハンマースホイ芸術の本質を見ることができるのである。

その他に、建築、風景、肖像といったモチーフごとのセクションを設けた。ハンマースホイは、年を経ることでモチーフや作風が変貌していくような作家とは異なり、あくまでも限定したモチーフにこだわり、初期から晩年まで同じような作品を作り続けた作家で

ある。その画業からは、展開や進歩という概念とは無縁の、最初から完成されていたひとりの芸術家像を見ることがとなる。本展では、ハンマースホイが繰り返し描いた主要モチーフに焦点を合わせることで、彼の芸術の本質を改めて検証することができた。さらに東京展では、同時代に活躍したピーダ・イルステスやカール・ホルスウのセクションも設け、ハンマースホイの強い影響を受けながらも暖かみのある彼らの室内表現と対比することで、ハンマースホイの暗く冷たい質感を帯びた芸術世界の独自性を効果的に際立たせることができた。

第一会場のロンドン、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツでは、会場の空間的制約から、東京展の105点に比べ72点と出品作品数を抑え、年代順の構成をとらざるを得なかった。本来のコンセプトと異なるのは残念であったが、イギリスでも初めての回顧展ということもあり大好評のうちに終了した。東京展においても予想を遥かに上回る来館者を得ることができ成功のうちに幕を閉じ、北欧美術を日本でも定着させる契機となったであろう。(佐藤直樹)

〔カタログ〕

編集：佐藤直樹、フェリックス・クレマー

制作：コギト

作品輸送・展示：ヤマトロジスティクス

会場設営：東京スタデオ

This exhibition was the first retrospective to be held in Japan on the subject of the major late 19th century Danish painter Vilhelm Hammershøi (1864-1916). Hammershøi studied at the Danish Royal Academy of Fine Arts in Copenhagen and then with his friends established the separatist art group, Den Frie Udstilling (The Independent Exhibition). Standing apart from the Academy, Hammershøi spent his entire life painting works that were well received throughout Europe. While his name is still not well known in Japan, he was one of the most important Northern European symbolist artists. His fame was such that Rodin's secretary and renowned poet Rainer Maria Rilke traveled all the way to Copenhagen to meet Hammershøi. After Hammershøi's death and with the rise of modernism, Hammershøi's name was largely and rapidly forgotten. It was not until 1997-98 that he came to the forefront again thanks to retrospective exhibitions held at



the Musée d'Orsay and the Guggenheim in New York. In 2003, the Hamburger Kunsthalle held a Hammershøi exhibition that recorded their highest number of visitors since their opening, reflecting the popularity of this painter. The Tokyo exhibition was organized by Felix Krämer, who directed the Hamburg exhibition, and Naoki Sato, NMWA curator, and they were assisted by Anne-Birgitte Fonsmark, director of the Ordupgaard, Copenhagen.

This exhibition focused on Hammershøi's most pervasive motif, the "interior". Hammershøi's style was strongly influenced by 17th century Dutch painting, and he specialized in the anachronistic motif of a still, domestic interior scene reminiscent of Vermeer's works. Using his own home as his stage, Hammershøi often presented these interiors with back views of his wife Ida. The motif of a woman's back turned toward the viewer serves to both draw the viewer into the painting psychologically, while also making us the witness to the housewife's room. In addition to Vermeer, such motifs – interiors and backs of women – can also be linked to the works of the great German Romantic C. D. Friedrich. In Hammershøi's works, however, the viewer is drawn into the painting by Ida's back view, at the same time, there still remains the sense of slight unease of the visitor whose welcome is belied by that silent back view. Nevertheless, however, Hammershøi's works were by no means bad in feeling. While they maintain a sense of unease, they seem enveloped in a silent painterly world that is endlessly fascinating to its viewers. In this manner, we can see the real value of Hammershøi's art work in his fusion of Dutch realism and Romantic emotive elements.

In addition to Hammershøi's interiors, the exhibition featured sections on Hammershøi's architecture, landscapes and portraiture. Hammershøi, unlike artists whose motifs and styles changed with the passing years, created the same type of works from his earliest period to his final years. From his oeuvre we can see that he was uninvolved with the concepts of development and progress, and rather in it we can see a singular complete artist. Because he focused over and over again on the same principle motifs, viewers have been able to reconsider the true nature of his art. The Tokyo exhibition also presented a section on Peter Ilsted and Karl Holsøe, two artists active at the same time as Hammershøi, who were also greatly influenced by Hammershøi. Through their interior expression characterized by warmth, we can see all the more how effectively Hammershøi set out his own unique art



world with its sense of cool darkness.

The exhibition was first held at London's Royal Academy of Arts, where, due to spatial limitations in the galleries, the number of displayed works was cut from the Tokyo exhibition's 105 works to 72 works. This also meant that the London show had to be arranged in a chronological fashion. While this unfortunately differed from the original concept for the show, as it was the first retrospective on Hammershøi in England, it was extremely well-received. The Tokyo exhibition was also able to close on slightly better numbers of visitors than anticipated, and it was an opportunity to help define the field of northern European art in Japan. (Naoki Sato)

[Catalogue]
 Edited by: Naoki Sato, Felix Krämer
 Produced by: Cogito Inc.

Transport and handling: Yamato Logistics Co., Ltd.
 Exhibition design: Tokyo Studio

ルーヴル美術館展 — 17世紀ヨーロッパ絵画

The Revolutions of the Classical Age

— European Painting of the 17th century from the Collection of the Louvre Museum

会期: 2009年2月28日 - 6月14日

主催: 国立西洋美術館 / ルーヴル美術館 / 日本テレビ放送網 / 読売新聞東京本社

入場者数: 851,256人

Duration: 28 February - 14 June 2009

Organizers: National Museum of Western Art / Musée du Louvre /

Nippon Television Network Corporation / The Yomiuri Shimbun

Number of visitors: 851,256

LOUVRE



2009.2.28 - 6.14
ルーヴル美術館展
— 17世紀ヨーロッパ絵画 —
国立西洋美術館

ルーヴル美術館の所蔵品による17世紀ヨーロッパ絵画展である。17世紀という時代的枠組みを設定し、横の関係において17世紀ヨーロッパ絵画の再検討を試みた。地域研究を出発点とする美術史にとって、このような超域的発想それ自体がすでにひとつの新機軸であるとも言えるが、本展の斬新な試みはそれだけにはとどまらない。本展では3つの大きな基軸を設け、それに従って、超域的に17世紀絵画を概観した。最初の軸は、「黄金の世紀とその陰」、ふたつ目が「大航海と科学革命」、最後が「聖人たちの世紀における古代文化」である。それゆえ、展覧会を構成する3つのセクションでは、各画派の絵画がその地理的な垣根を越えて並置された。

このような構成により、17世紀ヨーロッパという時代を多面的にとらえ、また、この時代が生み出したさまざまなイメージを総体として理解しようとしたのである。所属する画派の基本台帳から開放され、普段は遠くに置かれている作品と隣り合うような展示、たとえば、ムリーリョ(スペイン絵画)とコルトーナ(イタリア絵画)とラ・トゥール(フランス絵画)とが同じ部屋に配されるような展示は、いささかの混乱を引き起こしたかもしれない。けれども、美術史的展示と本展のような野心的構成とは、本来、相互に補い合って作品の本質を照らし出すのだろう。

フランス・ポストの描いたブラジル風景とクロード・ロランの古代の港湾風景とが隣り合うような展示は、一見したところ、奇異にしか

見えないかもしれない。一方は、ブラジルに赴いて異国の景観を描き、他は、教養あるローマの貴顕のために、古代の物語を題材にした理想的風景を創出した。けれども、ポストがはるか南米まで旅をして風景画を描いたことと、クロードが繰り返し旅をモチーフとした風景画を描いたことは、全く別の世界のことでなかった。

17世紀は大航海の時代であり、旅や遠い国のモチーフひとつにも大きな意味が込められていたのである。また、この時代は、ヨーロッパが初めて非ヨーロッパ圏の文化を明確に意識し始めた時代でもあった。オリエンタリズムは本展の主題ではないが、こうした問題も射程に入れながら本展は構想された。それは、日本で開催されるルーヴル美術館展に相応しいものであったと言えるだろう。

17世紀のこのような大きな歴史的背景を理解してもらうため、カタログでは日本とヨーロッパとの美術の交流を論じるエッセイ(ひとつは南蛮美術に関するもので、もうひとつは日蘭関連のもの)が収録され、また、イタリア絵画、フランス絵画、オランダ絵画、あるいは、東インド会社を研究する歴史家など異なる専門をもつ研究者による講演会が開催された。レンブラント、フェルメールをはじめとする多くの名作が出品されたこともあり、来館者数は予想を大きく超え、85万人にのぼった。いろいろな意味で、国立西洋美術館の50周年を記念するに相応しい企画であったと言えるだろう。(幸福輝)



【カタログ】

編集: 国立西洋美術館、京都市美術館、

日本テレビ放送網、ルーヴル美術館

制作: コギト

作品輸送・展示: 日本通運

会場設営: 東京スタジオ



This exhibition presented 17th century European paintings from the collection of the Louvre Museum. This exhibition, using a chronological framework of the 17th century, sought a reconsideration of 17th century European paintings and their relationships with each other. For art history that uses regional research as its basis, this type of approach that ignores geographical or political boundaries is in itself a new axis for study, but this was not the only novel experiment in this exhibition. The exhibition was arranged around three principle axes, and through this structure presented a borderless overview of 17th century painting in Europe.

The first axis was, "The Golden Century and Its Shadows", the second was "Great Ocean Voyages and Scientific Revolutions", and the third axis was "Classicism in the Century of Saints." The exhibition consisted of three sections, with works in each style displayed next to each other, rather than being sectioned off by region.

This construct allowed a multifaceted approach to the period known as the 17th century in Europe, and sought to present visitors with an overall view of the various images born during this period. Liberated from the basic formbook of each artist's school affiliation, works that are normally far from each other in gallery arrangements were displayed next to each other, for example, works by Murillo (Spanish painting), Corona (Italian painting), and La Tour (French painting). This type of display, in which the works of these three painters from different countries were hung in the same room, meant that probably some confusion would arise. However, art historical display and this type of wild method of art display can each mutually reflect on the true nature of the paired works.

The Brazilian landscape painted by Frans Post, and Claude Lorrain's image of an ancient harbor hanging right next to each other may have been considered strange at first. On the other hand, the depiction of the foreign scenery Post experienced in Brazil contrasts with Lorrain's ideal landscape based on classical narratives created for wealthy educated Roman aristocrats. However, the fact that Post traveled all the way to South America and painted the scenes he experienced, while Claude painted landscape after landscape on the motif of travel meant that the works did not come from completely different worlds.

The 17th century was the time of great ocean voyages, and travel and motifs from distant lands held great meaning. Further, during this period, Europe was, for the first time, beginning to establish a clear

awareness of non-European culture. While Orientalism was not a theme chosen for this exhibition, the exhibition was composed with this Orientalism in mind. Such a supplemental focus, indeed, seemed somehow appropriate for a Louvre museum exhibition held in Tokyo.

In order for visitors to understand the great historical background of the 17th century, the catalogue presented essays on the interaction between Japanese and European arts; one essay was on the so-called Namban art, or European art as seen by the Japanese, and another on the relationship between Japan and Holland. Further, lectures were given by a number of specialists whose studies focused on Italian painting, French painting, Dutch painting, and a historian who study the history of the Dutch-East Indian Company. Thanks to the presence of a number of masterpieces, such as works by Rembrandt and Vermeer, the number of visitors was greater than expected, and totaled more than 850,000. In many senses, this exhibition can be said to have been of a scale and subject suitable for the 50th anniversary of the NMWA.

(Akira Kofuku)

[Catalogue]

Edited by: National Museum of Western Art, Kyoto Municipal Museum of Art, Nippon Television Network Corporation, Musée du Louvre
Produced by: Cogito Inc.

Transport and handling: Nippon Express

Exhibition design: Tokyo Studio

Fun with Collection
見る楽しみ・知る喜び ― 宗教・芸術家・修復編
Fun with Collection
The Joy of Seeing and Knowing: Religion, Artists, and Conservation

会期: 2008年7月1日 - 8月31日

主催: 国立西洋美術館

場所: 本館、新館(常設展)

Duration: 1 July - 31 August 2008

Organizer: National Museum of Western Art

Venue: Main Building and New Wing (Museum Collection Galleries)



Fun with Collectionは、国立西洋美術館の所蔵作品を中心に、毎回特定のテーマを設けて美術作品を紹介する小企画展である。この企画は、子どもから大人までを対象に、美術作品をさまざまな視点から共時的に鑑賞する機会を提供することによって、美術作品をより身近なものとして理解し、楽しんでもらうことを目的としている。

美術作品を見ると、わき起こる喜びや悲しみといったさまざまな感情に心が揺り動かされることがある。こうした感情に身をまかせながら作品を鑑賞するのは、美術館を訪れる多くの人々にとっては自然な美術の楽しみ方である。しかし、ある作品を見て、疑問を感じたり、何かを発見したりすることもある。その瞬間、そこには感性だけではなく認識や批判、あるいは分析といった行為が始まっている。鑑賞者の多くは、美術を感性で体感するように楽しむ一方で、実は意識的に分析しながら作品を見てもいるのである。

昨年に引き続き、今年もまた3つの視点から、作品の背景にある文化的、あるいは科学的な情報を知ることで、それまでとは異なる作品の理解や楽しみ方を提供するプログラムを実施した。今回は、昨年のプログラム参加者に実施したアンケートで関心の高かった「芸術家」と「修復」、そして「宗教」(聖書を主題とする物語絵)をテーマに取り上げた。

識字率の低い時代においては、絵画や彫刻はキリスト教を布教するための重要なメディアであった。そこで、画家は神や特定の聖人をわかりやすく示すと同時に、聖書が伝える物語を荘厳に、あるいは情熱的に表現することによって、教えを広め人々の信仰心を喚起する役割を果たしたのである。今回は、聖書の物語や聖人を描いた絵画作品を取り上げて、クリスチャンではない鑑賞者にとって馴染みのない主題を解説しながら、登場人物のアトリビュションや題材となった物語の表現の工夫などを紹介した。

芸術家と言っても、時代や社会によって彼らの立場や役割、制作の動機などはそれぞれに異なるものである。そこで今回は、それらの違いに注目してふたつの異なる時代に活躍した画家たちを紹介した。ひとつは、当館の15世紀から17世紀のイタリア絵画を中心に、当時の画家と社会の関係に焦点をあて、もうひとつは20世紀の画家ピカソとマティスという画家同士の関係に注目した。

長い年月の後に痛んだ作品を修復する技術は、近年科学的な調査研究によってさらなる進歩を遂げつつある。修復は、作品のメディアによってその専門性も分かれている。今回は、タピスリーと紙と

いうふたつのメディアを取り上げ、それぞれの物質的特徴とその扱い方を紹介しながら修復の方法の一部を実見あるいは体験するプログラムを行なった。

今年のプログラムも昨年同様に好評であった。とくに作品の修復に対する関心は高く、プログラムの中で実見、あるいは体験できる作業や施設見学は参加者に人気があった。この2年間は大人を中心とするプログラムを実施してきたが、大人にとっても体験による学びの重要性が示された企画だったと思われる。当館では、子どもを対象とするプログラムは、ギャラリートークやファミリープログラムなど多様な学びのスタイルを意識したプログラムが実施されている。今回の成果をもとに、今後は大人に対しても多様なプログラムを用意する必要があると考える。

企画: 寺島洋子、横山佐紀、薬谷祐子、佐藤厚子(客員研究員)

The *Fun with Collection* series of programs introduce theme-related art works chosen from the NMWA's collections. The goal of this series is to assist a broad range of visitors, from children through adults, as they enjoy and become familiar with art works by offering opportunities to appreciate art works from a variety of different viewpoints.

Diverse emotions, from joy to sorrow and pain, strike the heart when we view art works. Surrendering ourselves to these emotions as we appreciate an art work is the perfectly natural way in which most people enjoy art works in museums. However, when viewing a certain work, there are also instances where questions arise or discoveries are made. In that instant, there are the acts of awareness, judgment and analysis that go beyond simple emotion. While most people appreciating art experience the visceral pleasure of enjoying the emotions evoked by art, sometimes there is also an element of conscious analysis of the art work in question.

Continuing on from last year's program, based on considering cultural or scientific information in the background of the creation of a work as a different way of understanding and enjoying art works, this year we presented a program in which visitors looked at art works from three specific viewpoints.

This time we took as our theme the three vantage points of "artist," "conservation" and "religion" (narrative paintings on Biblical themes). "Artist" and "conservation" were two areas of interest noted in last year's questionnaire.



Regarding the “religion” theme, in times when literacy rates were low, paintings and sculptures were important proselytizing tools for the Christian church. In these instances, the painter strove to make God and specific saints readily visually identifiable, while also expressing the Bible’s narrative tale as splendidly or as emotively as possible. These efforts allowed the paintings to spread Christian teachings and evoke devotion in the hearts of worshippers. This program took for its “religion” theme Biblical narrative paintings or paintings depicting saints. We explained the unfamiliar subject matter to the non-Christian participants while also introducing ways of deciphering painting elements, such as each saint’s particular attributes and the subject matter attributes.

Regarding the second theme, the term “artist” meant different things, different social positions and roles, and different creative motives, depending on the period and society of the day. This program focused on these differences by introducing painters active in two different time periods. First, we focused on Italian 15th to 17th century painters, and then we focused on the 20th century artists Picasso and Matisse.

Regarding “conservation,” the techniques used to repair art works that have suffered from long years of exposure and wear have seen many advances thanks to recent scientific surveys and research. Conservation work differs by the medium of the art work, and there are specialists for each different medium. For this theme we examined two media, textiles and paper, examining the physical characteristics of each and how they are treated. Then participants were either shown one part of the conservation methods used, or they experienced that method.

This year’s program, as in previous years, was well-received. In particular, interest was very high in “conservation”, and clearly participants enjoyed program elements that involved either actual participation or visiting a work site. For the past two years the program has concentrated on adult audiences, and it has made us consider how adults can also learn from experiential programming. The NMWA’s programs aimed at children include a variety of different program types, such as gallery talks and family programs, to involve participants in a variety of different learning styles. Based on this year’s experience, we believe that there is a greater need for the preparation of programs in



diverse learning styles that are aimed at the older visitors to the museum as well as younger.

Organized by Yoko Terashima, Saki Yokoyama, Yuko Waragai, Atsuko Sato (Guest Researcher)

修復記録 Restoration Record

[絵画]

アレッサンドロ・ペドリ・マツォーラに帰属
《ヴィーナスとキュービッド》
1560-70年頃
油彩、カンヴァス
1,048×610 mm
P.1962-0003

保存状態：
前年記録参照

処置：
前年に引き続き処置
1. 充填
2. 補彩
3. ニス引き

[額縁]

木彫り金地額縁
ボニファーチョ・ヴェロネーゼ用
H 1,440×W 1,825 mm

保存状態：
四辺切断組立て状態の分離。角の欠損、
木部虫食い、金地剥落

処置：
1. 本体木部の補強、接着
2. 木部欠損の木彫刻部制作、充填
3. 虫食い充填
4. 彩色、箔押し

(河口公男)

保存科学に関わる活動報告 Report on Conservation Science Activities

以下の業務を行なった。

1. 環境管理
2. 館内への生物侵入・生息状況の調査(捕虫用粘着トラップによる調査)
3. 貸出作品の管理
4. 所蔵作品の科学的調査
5. 《地獄の門》および前庭彫刻免震装置の管理

1. 環境管理について

A. 材料測定

新館改装にあたって、使用する床材、塗料、接着剤などの安全性を調査した。調査は、デシケータ内に試料を入れて、パッシブ・ドジチューブによりホルムアルデヒド、酢酸、アンモニアなどの濃度を測定した。新館改装工事後は、東京文化財研究所の指導を受け、パッシブインジケータにより有機酸とアンモニア濃度の調査を行なった。空調開始1カ月後には一部の部屋でアンモニア濃度が基準値(30 ppb)以上残留していたが、換気とケミカルフィルターの効果により2カ月後、3カ月後には問題のない濃度になり、2009年6月の開館を迎えた。そのほか、作品の展示時に使用する布や粘着シートについて安全性を確認した。

B. 温度・湿度管理

新館改装にあたって、新館では毛髪式自記記録計の数を増やし、設置位置を改めた。本館では2008年5月から8月にかけて空調の異常が多発したため、管理業者との話し合いを繰り返し、冷温水発生器の流量センサやフロースイッチを交換することで対応した。また、展示室以外のバックヤードにおける換気率を見直し、人数が少ない部屋では換気率を減らして温度と湿度の安定化を図るとともに省エネルギー化を図った。

3. 貸出作品の管理について

作品貸出が適切な保存環境のもとで行なわれるよう、貸出先の施設環境をファシリティ・レポートにより事前に検討し、必要に応じて作品保存のための適切な処置を貸出条件として求めている。また、貸出作品のクレートと作品裏面に装着したデータロガーにより、作品搬出から返却までの期間の温度と湿度を測定し、記録されたデータの分析結果をもとに報告書を作成している。

貸出先の美術館の温度と湿度が安定していないときには、作品にクライメートボックス(アクリルの密閉型ボックスのこと。シリカゲルやアートソープは含まない)を装着して貸し出している。数回にわたる貸出記録から、ボックス内部の湿度は安定するものの、温度は1~2℃上昇してしまうことが明らかになった。

4. 所蔵作品の調査について

作品の修復にあたって、科学調査を行なった。

昨年度に引き続きアレッサンドロ・ベドリ・マッツォーラに帰属《ヴィーナスとキューピッド》(油絵、カンヴァス):顔料とメディウム(展色材)の調査をした。地塗りは鉛白、炭酸カルシウム白(ドロマイトおよびケイ酸塩化合物の粒を含む)、土性顔料、チャコールブラックを含んでいること、珍しい顔料として結晶質のヘマタイトが使用されていることが判明した。

ジャン=ジャック・エンネル《婦人像》(油彩、カンヴァス):地塗りは鉛白と炭酸カルシウム白から構成されていた。

《シャンボール城、九月》(タピスリー):繊維の測色、繊維の同定、媒染剤の同定を行なった。

5. 《地獄の門》および前庭彫刻免震装置の管理

《地獄の門》および前庭彫刻の免震装置は設置後10年を経たので、定期点検を行なった。《地獄の門》については、地震および風の観測装置の無停電電源装置とデータ収録装置のAD基板の交換を行なった。これは、保存修復室との共同作業である。(高嶋美穂)

The department carried out the following work during this fiscal year:

1. Environmental Control Management
2. Pest Management (Survey using pest traps)
3. Loan Facilities Management
4. Scientific Examination of Collection Works
5. Management of Seismic Isolation System Fitted to *The Gates of Hell* and Other Forecourt Sculptures

1. Environmental Control Management

A. Evaluation of Materials

The department examined the emission quantity of volatile organic compounds from the flooring, wall materials and adhesives being planned for use in the renovation of the New Wing to evaluate the safety of the materials. These surveys involved placing the test material in a desiccator and using passive dosimeter tubes to record the emitted formaldehyde, acetic acid, ammonia and other materials. After the completion of the New Wing renovations, organic chemicals and ammonia concentrations were measured using the passive dosimeter tubes with the help of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo. One month after starting the environmental control system, one section of the room remained above the standard (30 ppb) for ammonia. After flushing out the air and the effective use of chemical filters, safe concentrations were confirmed two months and three months after the start of operations. This meant that the New Wing was opened to the public in June 2009. In addition, the safety of fabrics and adhesive sheets used in the display of art works was also tested.

B. Temperature and Humidity Management

With the renovation of the New Wing, we increased the number of recording hygrothermographs positioned in the New Wing and revised their positioning to maintain constant temperature and relative humidity (RH). There were problems with the environmental control system in the Main Building from May to August 2008, and this led to repeated discussions with the maintenance staff. Replacing the flow sensor and flow switch on the cold and hot water generator solved the problem. Further we decreased the Ventilation Rate in the staff rooms frequented by only a few people to save energy and to maintain constant temperature and RH.

3. Loan Management

The Conservation Science Section provides management and consultancy regarding loan facilities as one of its regular duties. This process involves evaluating facilities reports and analyzing climate data on works of art on loan. It is necessary to ensure that the borrowing institution's environment is maintained at appropriate levels for art works on loan. Therefore, prior to any outgoing loan, facilities reports are submitted to the Conservation Science Section from all borrowing institutions, and as necessary, appropriate condition measures are stipulated in the loan agreement. Further, the data loggers installed in the object's transport crate and on the back surface of the art work itself monitor the temperature and relative humidity (RH) fluctuation from the time of the object's departure from the NMWA to its return. Reports are produced from analysis of the data recorded on these devices.

When the temperature and RH are not stable at the borrowing site, an art work can be loaned out in a climate box fitting. A climate box is a sealed acrylic box. The box does not include any humidity control silica gel. After having been used on numerous loans, the records taken by the data loggers reveal that although RH is stable within the climate box, the temperature rises around 1 to 2 °C.

4. Survey of Collection Works

When works are treated for conservation purposes they are subjected to a scientific examination.

Venus and Cupid, attributed to Alessandro Bedoli Mazzola (oil on canvas):

The ground contains lead white, calcium carbonate white, dolomite and silicate granules, earth and charcoal black. Crystalline haematite, an unusual pigment, was found in the paint layers.

Portrait of a Woman, Henner, Jean-Jaques (oil on canvas):

The ground includes lead white and calcium carbonate white.

Le Château de Chambord: Le Mois de Septembre (tapestry): Fiber color examination, fiber identification, and mordant identification.

5. Management of the Seismic Isolation System Fitted to *The Gates of Hell* and Other Forecourt Sculptures

Testing was conducted on the equipment now that ten years have passed since the installation of the seismic isolation of *The Gates of Hell* and the other Forecourt sculptures. The UPS (uninterruptible power supply) and the AD board for the data recorder on the seismic and wind activity monitors for *The Gates of Hell* were replaced. This was a joint project run by the Conservation Science Department and the Conservation Department.

(Miho Takashima)

研究資料センター The Research Library

研究資料センターは西洋美術史や関連諸学に関する資料を収集し、当館職員の職務の遂行に資すること、および外部の美術館学芸員、大学研究者らの調査研究に資することを活動の柱としている。また図書や雑誌に加えて、収蔵作品の情報や美術館ウェブサイトの管理も行なっている。本年度は新館の空調設備工事および開館50周年記念事業などの行事に合わせて、次のとおり活動した。

資料収集については、中世から20世紀前半までの西洋美術を収集対象とする方針にしたがって、図書および逐次刊行物の収集に努めた。おもなところでは、1899年から1902年まで刊行された『ディ・インゼル』誌を全巻揃いで入手したほか、『プロイセン文化財団年報』誌の欠号補充などを行なった。また国内外の美術館、大学図書館など計437機関と資料交換を実施し、当館刊行物を寄贈するとともに、一般の書籍流通では入手困難な展覧会カタログ、研究紀要、年報、ニュースレター等を受贈した。

図書整理については、図書1,317件、逐次刊行物1,400件を図書館システム「LVZ」に登録し、装備・配架を行なった。

今年度は国内の美術館図書館に先駆けていくつもの電子リソースを積極的に導入し、学術雑誌アーカイブ「JSTOR」、欧米で開催された美術競売カタログのデータベース（「Art Sales Catalogues Online」）、美術事典（「Oxford Art Online」）を新たに取り入れた。これらの美術分野の先端的レファレンス・ツールを研究資料センターで利用に供するとともに、国内の美術館関係者に対する広報（全国美術館会議 情報・資料研究部会における情報提供等）、美術館ウェブサイトでの案内等（メニュー「学術情報案内」）を積極的に行ない、美術に関する情報拠点としての役割を果たせるよう努めた。

新館空調設備工事のため、研究資料センターは7月1日から11月28日まで閲覧室を閉鎖し、この間は利用者サービスを限定した（複写申込みのみ受付）。この期間以外は例年どおり週2日（火・金曜日）、外部利用者向けに開室した。計89日間の開室日に美術館学芸員、大学院生、画廊スタッフらの計262人の利用があった。

収蔵作品に関する情報管理については、前年度に続いて平成20年度科学研究費補助金研究成果公開促進費（研究成果データベース）を獲得し、1）『国立西洋美術館年報』（1967年～現在）掲載の新収作品の来歴・展覧会歴・掲載文献歴（『国立西洋美術館総目録 絵画篇』掲載分を除く）300件、作品貸出履歴（巡回展を含む）2,300件、2）『国立西洋美術館総目録 絵画篇』（1979年）・『国立西洋美術館所蔵絵画目録 昭和54年・平成元年』（1990年）の展覧会歴300件の週及データ入力、3）既存登録データの修正、展示情報の更新、4）新収作品（カラー）および版画（モノクロ）の画像1,070件を作成・登録し、ウェブサイト掲載サイズに調整するための画像トリミング・変換作業も併せて実施した。独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムに対しては、新収作品データ等17件を提供した。

所蔵作品の情報公開については、2008年8月、昨年度末にウェブ公開した国立西洋美術館所蔵作品データベースの英語版インターフェースを装備し、これにより日英2カ国語での情報検索および閲覧が可能になった。

所蔵作品データベースに関しては、さらに個々の作品情報の引用やブックマーク登録をできるようにするため、「パーマリンク」機能を追加した。これは、それまで当館の収蔵作品データベースでは、作品詳細画面のURLがデータベース演算結果を表示しているため固定ではなく、同じ作品を参照するにはもう一度初めから検索し直さなければならなかったが、新たに所蔵作品ごとに永続的URLを割り当て、そのページへのリンク（パーマリンク）を作品詳細画面に表示させるといったものである。これにより、各作品の情報画面を引用したり、ウェブブラウザ上でブックマーク登録したりすることができるようになり、作品情報への直接アクセスが簡単に行なえるようになった。パーマリンク機能追加と同時に検索エンジン対策を施し、美術館ウェブサイト上に全作品の一覧を掲載する「総索引メニュー」を追加するなどの工夫を行なった。

美術館ウェブサイトについては、広く海外へも情報を発信するため、引き続き展覧会情報（常設展、特別展）やイベント（講演会・シンポジウム等）、教育プログラムなどの日英2カ国語による情報提供に努めたほか、新たに開館時から現在までの展覧会の基本的情報を英訳し公開した。さらに国立西洋美術館開館50周年記念サイトの特設し、記念事業や美術館活動の多角的な紹介に努めた。年間を通じて活動支援を受けているエプソンのウェブサイトでは国立西洋美術館の所蔵作品に関する連載やダウンロードサービスを開始するなど、館内外のウェブサイトを幅広く活用して情報発信に努めた。（川口雅子）

〔主要収集資料、新規導入データベース〕

Die Insel. Monatsschrift mit Buchschmuck und Illustrationen
Jahrbuch preussischer Kulturbesitz
JSTOR
Art Sales Catalogues Online
Oxford Art Online

〔研究資料センター公開〕

開室日数：89日
登録人数：104人（新規63人、更新41人）
閲覧者数：262人
出納：1,190点
複写：752件（10,269枚）
撮影：22件（149枚）
レファレンス：6件

〔見学会〕

2008年12月8日 大分県立芸術会館
2008年12月18日 財団法人吉野石膏美術財団

2009年3月19日 東京都立中央図書館

[ウェブサイト]

アクセス件数:7,242,549ページビュー

開館50周年特設サイト設置:2008年8月11日

[国立西洋美術館所蔵作品データベース]

英語版インターフェース公開:2008年8月18日

パーマリンク設置:2009年3月3日

公開データ数:テキストデータ4,320件、画像データ4,210点(著作権保護作品を除く)

アクセス件数:164,784ページビュー(計測を開始した2008年10月から2009年3月までの数値)

The Research Library collects materials related to the history of western art and its ancillary disciplines, provides materials for the advancement of work by museum staff members, and aids in survey research done by curators and scholars from other institutions. In addition to its management of the books and journals in the NMWA holdings, the Research Library also manages information on the works in the collection and manages the NMWA official website. The following is a report on the activities of this fiscal year that occurred alongside the climate control work on the New Wing and the events related to the museum's 50th anniversary.

In terms of materials collection, we continued to collect books and periodicals in line with the collection policy focusing on western art from the medieval period through the first half of the 20th century. The library was able to obtain the entire 1899-1902 run of the German periodical *Die Insel. Monatsschrift mit Buchschmuck und Illustrationen*, along with the missing issues of the *Jahrbuch preussischer Kulturbesitz*. As in previous years, we conducted materials exchange with a total of 437 museums and university libraries both in and out of Japan, presenting them with copies of NMWA publications. We received in exchange hard to come by exhibition catalogues, research reports, annual bulletins and newsletters.

Cataloguing activities proceeded, with 1,317 books and 1,400 periodicals entered into the LVZ library system, prepared and shelved.

During this fiscal year, NMWA took a pioneering roll by actively introducing various electronic resources, including the introduction of JSTOR, Art Sales Catalogues Online, and Oxford Art Online. These leading reference tools in the field of art, introduced by the Information and Resources Research Committee of the Japan Council of Art Museums, can be used in the Research Library.

Due to the climate control work conducted on the New Wing, the Research Library closed its reading room from July 1 to November 28, and during that period user services were limited (photocopy orders only). Other than this time frame, the reading room was open to outside users as in the past, on two days a week (Tuesdays and Fridays). Thus the reading room was open for a total of 89 days and utilized by 262 art museum curators, graduate students, gallery staff members and other qualified individuals.

Regarding the management of information on works in the NMWA collection, continuing on from the previous fiscal year, the library received a Grant-in-Aid for Publication of Scientific Research Results from the Japan Society for the Promotion of Science to assist with the creation of a research results database. Information management activities included:

- 1) Retroactive data entry for 300 sets of information on newly acquired works (provenance, exhibition history, bibliography) published in the NMWA Annual Reports (1967 to present); entry of 2,300 art work loan histories (including traveling exhibitions);

retroactive cataloguing of 300 exhibition records taken from the NMWA General Catalogue, Painting section (1979) and the NMWA Collection Painting Catalogue (1990).

- 2) Corrections to existing data, and revision of exhibition information,

- 3) Production of and recording of 1,070 images, with color used for newly acquired art works, and B/W for prints. The images were prepared for website presentation size through image trimming and exchange. Regarding the Union Catalog of the Collections of the National Art Museums, Japan, the library produced data on 17 newly acquired art works for inclusion in the Union Catalog.

In terms of the providing information on the collection works to the public, in August 2008, the English version of the NMWA Collections Database, made public at the end of the previous fiscal year, was implemented, and now it is possible to do information searches and viewing in either Japanese or English.

Regarding the collections database, a Permalink (Persistent Link) function has been added to the database to allow for quoting from the individual object information and registering bookmarks. In the previous version of the collections database, the URL for each object's page was not set due to database structure, and thus it was necessary to re-conduct a search for the object any time it was referred to. The new provision provides constant URLs for collection works, and a Permalink to this URL will always result in accessing the specific object's own page. This will allow people to quote each object's information page or create a bookmark to the work, allowing for simple, direct access to the object information. At the same time the Permalink function was added, the search engine was optimized, with a General Index Menu added to the NMWA website that presents an overview of all works in collection.

In order to make it possible to provide more information to non-Japanese reading website visitors, efforts are being made to provide bilingual information on the NMWA website, including ongoing exhibition information (permanent collection displays and special exhibitions), events (lectures, symposia, etc.) and educational programming. Further basic information on all exhibitions held at the NMWA from its opening to the present is provided in English. A special site was made to commemorate the 50th anniversary of the NMWA, providing a multi-approach introduction to the commemorative events and various museum activities. The Epson Corporation provides support for museum activities throughout the year, and the Epson website includes links to art works in the NMWA collection and a download service. These and other projects reflect our efforts to provide information as broadly as possible on both internal and external websites.

(Masako Kawaguchi)

[Major Acquisitions and Newly Acquired Databases]

Die Insel. Monatsschrift mit Buchschmuck und Illustrationen

Jahrbuch preussischer Kulturbesitz

JSTOR

Art Sales Catalogues Online

Oxford Art Online

[Public Use of the Research Library]

Open days: 89 days

Registered users: 104 (63 newly registered, 41 renewals)

Number of visitors: 262

Number of items requested: 1,190

Number of photocopies made: 752 requests for a total of 10,269 pages copied

Photographs requested: 22 requests for a total of 149 photographs

Reference requests: 6

[Study Visits]

December 8, 2008: Oita Prefectural Art Museum, Viewed Management System for Collections Information

December 18, 2008: Yoshino Gypsum Art Foundation, Visited Research Library

March 19, 2009: Tokyo Metropolitan Library, Visited Research Library

[Website]

Hits: 7,242,549 page views

August 11, 2008: Opened the 50th Anniversary Site

[NMWA Collections Database]

English Interface Begun: August 18, 2008

Permalink feature installed: March 3, 2009

Public Data: Text tracker: 4,320; Image data: 4,210 items (except those works protected by copyright)

Hits: 164,784 page views (figures calculated from October 2008 through March 2009)

教育普及に関わる活動報告 Report on Educational Programs

1) 常設展関連プログラム

当館の所蔵作品および常設展示に関連して実施されるプログラム。

■Fun with Collection ファン・ウィズ・コレクション

今回の「見る楽しみ・知る喜び——宗教・芸術家・修復編」(詳細は「展覧会」参照)では、当館の作品をより深く理解することを促すために、キリスト教の聖書、芸術家、作品の保存修復の各分野における知識や情報を提供するプログラムを実施した。

〈宗教の視点から〉

「聖人・聖書のトークシリーズ」

常設展示室の聖人や聖書の物語を描いた絵画作品のギャラリートーク。

日時・場所:①8月5日(火)、8日(金) ②8月12日(火)、15日(金)
各日11:00-12:00、14:00-15:00 展示室

対象・参加者:一般/30名

講師:①巖谷睦月(東京藝術大学大学院生)

②袴田紘代(東京藝術大学大学院生)

参加費:常設展観覧料

〈芸術家の視点から〉

「イタリア・ルネサンスの画家と顧客と社会」

日時・場所:8月2日(土) 14:00-15:30 講堂

対象・参加者:一般/67名

講師:越川倫明(東京藝術大学准教授)

参加費:無料

「マティスとピカソ」

日時・場所:8月30日(土) 14:00-15:30 講堂

対象・参加者:一般/71名

講師:関直子(東京都現代美術館主任学芸員)

参加費:無料

〈保存修復の視点から〉

「タピスリーの修復」

講義とデモンストレーションでタピスリーの修復を紹介するプログラム。

日時・場所:7月19日(土) 13:30-15:30 講堂・修復室

対象・参加者:中学生以上(一般)/20名

講師:石井美恵(修復家)

参加費:無料

「水彩画を素敵に見せるコツ——もっとよく紙を知る」

紙の性質と水彩画をより良く見せる方法を紹介するプログラム。

日時・場所:8月14日(木) 11:00-16:00 講堂

対象・参加者:高校生/12名

講師:坂本雅美(修復家・東北芸術工科大学講師)

参加費:無料

「紙の修復」

講義とデモンストレーションで紙の修復を紹介するプログラム。

日時・場所:8月16日(土) 13:30-15:30 講堂

対象・参加者:中学生以上(一般)/17名

講師:坂本雅美(修復家・東北芸術工科大学講師)

参加費:無料

■FUN DAY 2008 ファン・デー

ふだん当館にあまり足を運ばない人に来館してもらうために、さまざまなプログラムと共に常設展示室を無料開放する日。

日時・場所:9月20日(土)、21日(日) 9:30-17:30 本館全体・前庭

プログラム内容:①建築ツアー

②ギャラリートーク「常設展、この1点」

③フォトサービス

④パズル

⑤前庭コンサート

⑥ボランティア紹介コーナー

対象・参加者:一般/9月20日=1,128名、21日=1,407名

■クリスマス・プログラム

「クリスマス・キャロル」

クリスマスに教会で歌われる讃美歌などを特集したアカベラのコンサート。

日時・場所:12月20日(土)、21日(日) 12:40-13:20、15:40-16:20
本館1階ロビー(常設展入口付近)

企画:西山奈々子

演奏:末千紘、谷原めぐみ(ソプラノ)、山崎春奈、坂上賀奈子(アルト)、小俣貴弘、田中研(テノール)、加未徹(バス)

対象・参加者:一般/400名

参加費:無料

「絵でたのしむクリスマス」

クイズや創作を通して天使が描かれた絵画作品を楽しむプログラム。

日時・場所:12月20日(土)、21日(日) 10:00-11:30、14:00-15:30
講堂・展示室

対象・参加者:6-10歳の子どもの同伴の大人/62名

参加費:無料

2) 特別展関連プログラム

年3回開催される特別展に関連して実施される、講演会、シンポジウム、スライドトーク、ギャラリートーク、コンサートなど。



■講演会

時間・場所：14:00 - 15:30 講堂

対象・参加費：一般・無料

[ウルビーノのヴィーナス展]

4月12日(土) 参加者：125名

「イタリア文学におけるヴィーナスとその周辺人物たち」

浦一章(東京大学准教授)

4月19日(土) 参加者：149名

「《オランピア》から《ウルビーノのヴィーナス》へ——近代絵画と伝統」

三浦篤(東京大学教授)

5月10日(土) 参加者：103名

「ルネサンス美術に表わされたヴィーナス——《ウルビーノのヴィーナス》を中心として——」

渡辺晋輔(当館主任研究員)

[コロー展]

6月14日(土) 参加者：124名

「今なぜコローか」

ヴァンサン・ボマレド(ルーヴル美術館絵画部長・統括学芸員)

高橋明也(三菱一号館美術館長・当館客員研究員)

7月6日(日) 参加者：102名

「コローと日本人：受容とコレクションの歴史」

井出洋一郎(東京純心女子大学教授)

7月27日(日) 参加者：135名

「コロー 19世紀美術の体現者」

高橋明也(三菱一号館美術館長・当館客員研究員)

8月3日(日) 参加者：134名

「風景画家コローが描く人物画」

隠岐由紀子(帝京平成大学専任講師)

[ハンマースホイ展]

9月30日(火) 参加者：86名

「カール・ドライヤーの映画におけるハンマースホイの影響」

アネ=ピアギデ・フォンスマーク(コペンハーゲン、オードロブゴー美術館長)

10月4日(土) 参加者：120名

「ハンマースホイと象徴主義」

フェリックス・クレマー(フランクフルト、シュテューデル美術館学芸員)

11月22日(土) 参加者：141名

「19世紀末デンマーク、黒衣の女性が語るもの」

田辺 欧(大阪大学世界言語研究センター准教授)

[ルーヴル展]

2009年2月28日(土) 参加者：96名

「古典主義時代の変革——新しい『黄金の世紀』のために」

ブレーズ・デュコス(ルーヴル美術館絵画部キュレーター)

3月7日(土) 参加者：90名

「17世紀ヨーロッパに流れ込んだアジアのモノ」

羽田 正(東京大学教授)

■スライドトーク

時間・場所：18:00 - 18:40 展示室あるいは講堂

対象・参加費：一般・無料ただし展覧会観覧券が必要

[ウルビーノのヴィーナス展]

スライドトーク：渡辺晋輔(当館主任研究員)

4月11日(金) / 25日(金)、5月9日(金)

参加者：計353名

[コロー展]

スライドトーク：鈴木伸子(東京藝術大学大学院)

6月20日(金)、7月11日(金) / 25日(金)、8月8日(金) / 22日(金)

参加者：計565名

[ハンマースホイ展]

スライドトーク：佐藤直樹(当館主任研究員)

10月10日(金) / 24日(金)

スライドトーク：萬屋健司(大阪大学大学院)

11月7日(金) / 21日(金)

参加者：計382名

[ルーヴル展]

スライドトーク：高城靖之(慶應義塾大学大学院)

3月6日(金) / 27日(金)

参加者：計242名



■コンサート

「コローの音楽趣味」

コローは音楽を愛し、しばしばその作品にも楽器を登場させているが、マンドリンとハープによる楽曲を中心に、コローと同時代の音楽を楽しむコンサート。

日時：7月10日(木) 18:00-20:00(17:30開場)

場所：企画展示ロビー(B2F)

企画・トーク：瀧井敬子(東京藝術大学演奏芸術センター助手)

照明：海藤春樹

演奏：青山 忠、小野朋子(マンドリン)、岩城晶子(ハープ)、北川森央(フルート)、原 裕子(ヴィオラ)

制作アシスタント：西山奈々子

対象・参加者：一般/100名

参加費：1,500円

■障がい者のためのプログラム

「コロー展特別鑑賞会」

コロー展の作品について、30分程度の概要説明を講堂で行なった後、参加者に自由に鑑賞してもらうプログラム。

日時：6月28日(土) 18:00-20:00

参加者：147名

共同実施：三菱商事

3)ファミリープログラム

ファミリープログラムは、常設展が無料観覧となる各月の第二・第四土曜日に行なわれる。常設展示室で利用する家族向けの鑑賞用教材「びじゅつる」の無料貸与と、コレクションの鑑賞と創作などの体験がセットになった「どようびじゅつ」があり、いずれも教育普及室とボランティアスタッフによって運営、実施されている。

■びじゅつる

工事で新館閉室のため中止。

■どようびじゅつ

常設展示室の作品鑑賞とそれに関連する創作や体験がセットになった申込制プログラム。今年度は、3種類のプログラムを実施した。

「アートでカルタ」

グループに分かれて所蔵作品を使って作成したカルタで遊び、その後カルタにした実作品を展示室で鑑賞した。次に参加者は展示室で選んだ絵の読み札をつくり発表した(内容は6回とも同じ)。

対象：6-10歳の子どもと同伴の大人

日時：4月12日(土)*午前のみ/26日(土)、5月10日(土)*午前のみ/24日(土) 10:00-11:30、14:00-15:30

参加者数：計105名

「イチ、ニ、サン、シ、Go! ロダン」

ゲームを通して体と心をほぐし、ペアやグループになって体でいろいろなモノを表現した。彫刻家と彫刻のゲームをした後、展示室に行きロダンの彫刻を鑑賞した(内容は12回とも同じ)。

対象：6-10歳の子どもと同伴の大人

日時：7月12日(土)/26日(土)、8月9日(土)/23日(土)、9月13日(土)/27日(土) 10:00-11:30、14:00-15:30

参加者数：計204名

「ワン・だふる・びじゅつかん」

絵に描かれた犬に着目したプログラム。所蔵絵画作品に描かれた犬を主人公とする物語を聞いた後、展示室で犬が描かれた絵画作品を鑑賞し、最後は紙袋を利用して犬を作った(内容は4回とも同じ)。

対象：6-10歳の子どもと同伴の大人

日時：2009年3月14日(土)/28日(土) 10:00-11:30、14:00-15:30

参加者数：計53名

4)学校関連プログラム

■スクール・ギャラリートーク

当館の常設展示作品について、ボランティアスタッフが中心となって実施している予約制のプログラム。

2008年度：2,122名(75件)

未就学児童=28名(1件)、小学生=1,046名(25件)、中学生=788名(37件)、高校生以上=260名(12件)

■オリエンテーション

大人数の団体を対象に、講堂で行なう常設展あるいは特別展についての予約制の解説で教育普及室が実施している。

2008年度：979名(14件)

小学生=587名(7件)、中学生=172名(1件)、高校生以上=220名(6件)

■職場訪問

修学旅行あるいは総合学習の一環としてグループで来館する生徒を対象に、教育普及室が対応している。

2008年度：46名(11件)

中学生=44名(9件)、高校生以上=2名(2件)

■先生のための鑑賞プログラム

特別展ごとに小・中学校、高校の教員を対象に、展覧会の趣旨やおもな作品について、展覧会担当者が講堂で行なう解説。

「ウルビーノのヴィーナス展」

日時：4月4日(金) 18:00-18:40

講師：渡辺晋輔(当館主任研究員)

参加者：124名(他、観覧のみ53名)

「カラー展」

日時：6月27日(金) 18:00-18:40

講師：陳岡めぐみ(当館研究員)

参加者：47名(他、観覧のみ29名)

「ハンマースホイ展」

日時：10月17日(金) 16:00-20:00(レクチャー 18:00-18:40)

講師：佐藤直樹(当館主任研究員)

参加者：35名(他、観覧のみ20名)

■夏期教員研修

東京都中学校美術教育研究会／武蔵野市小中学校美術研究会／
国立西洋美術館合同研修会

日時・場所：7月31日(木) 9:30-15:30 国立西洋美術館

参加者：84名

東京都図画工作研究会／東京国立近代美術／東京都現代美術館／
国立西洋美術館合同教員研修会

日時・場所：8月25日(月) 9:30-17:00 東京国立近代美術館工芸館

参加者：78名

その他に区、市単位で実施した教員研修

参加者：118名(7件)

5) ボランティア

当館では、2004年にボランティア制度を立ち上げ、その年の後半から活動を開始した。ボランティアスタッフは、ファミリープログラムとスクール・ギャラリートークを中心に活動を行なっている。また、活動に必要な知識や技術を身につけるため、年間を通じて随時研修にも参加している。9月には第2回目のボランティア募集を行ない、従来の15名('08年)に加え、新たに19名が加わった。新規ボランティアスタッフは、来年度からの活動に向けて、11月以降さまざまな事前研修に参加した。

■2006年度の活動内容

①ファミリープログラム(ファミリープログラム欄参照)

どうぶじゅつ：体験型プログラム「どうぶじゅつ」におけるトーク
および創作などの補助と有志による企画。

②スクール・ギャラリートーク(学校関連プログラム欄参照)

学校の児童生徒向け対話型トークの実施。

③その他

・9月20日(土)、21日(日)に行なわれた「FUN DAY」にて、ボランティア紹介コーナーを設け、ディスプレイの制作(有志)、当日の紹介コーナーの運営を行なった。また、一般に向けた美術品のギャラリートーク(所蔵作品の10分間トーク)を行なった。

・12月20日(土)、21日(日)に行なわれた家族向けプログラム「絵でたのしむクリスマス」のプログラムを企画・実施した。

■2008年度の研修

①4月19日(土) 講演会／スクール・ギャラリートークの新コース発表

②6月12日(木) どうぶじゅつ「イチ、ニ、サン、シ、Go!ロダン」トリアル

③9月4日(木) 「FUN DAY」について

④10月16日(木) 08年度前期の活動の振り返り

⑤11月7日(金) 新規ボランティア事務手続き／ボランティア研修概要説明

⑥11月14日(金) コレクション概説(新藤 淳、陳岡めぐみ)

⑦11月28日(金) 国立西洋美術館概要(青柳正規)

研修資料センターについて(川口雅子)

⑧12月5日(金) 美術館概要・教育普及活動について(寺島洋子)

企画展関連の教育活動について(横山佐紀)

⑨12月19日(金) ボランティア・ゼミ(美術史関連)／アートカードの紹介と実施

⑩1月9日(金) コレクション概説(渡辺晋輔、村上博哉)

⑪1月23日(金) コミュニケーションに関する講義(石澤典夫、NHKアナウンサー)

展示室でのお客様の対応について(齊藤 亮、協栄ビルメンテナンス)

⑫1月25日(日) 講演「ル・コルビュジェと本館」(山名義之)

講演「ル・コルビュジェと日本近代建築」(松隈 洋)

⑬2月5日(木) 子ども向けトークについて(寺島洋子)

ボランティアAの活動内容について(藁谷祐子)

⑭2月12日(木) どうぶじゅつ「ワン・だふる・びじゅつかん」トリアル

⑮2月18日(水) 新規ボランティアによるスクール・ギャラリートーク見学

⑯2月26日(木) 新規ボランティアによる模擬スクール・ギャラリートーク

⑰3月8日(日) 新旧スタッフ会合、活動のオリエンテーション

⑱3月14日(土) どうぶじゅつ見学およびプログラム補助

⑲3月28日(土) どうぶじゅつ見学およびプログラム補助

* スクール・ギャラリートークの評価 7月25日(金)

6) インターンシップ

当館では、西洋美術に関心をもつ人材の育成と、当館の活動をより広く理解してもらうことを目的として、大学院生以上を対象としたインターンシップを実施している。当館職員の指導のもと、研修生は所蔵作品の調査、展覧会や教育プログラムの企画補助など、それぞれが希望する専門分野に分かれてさまざまな業務に実際に携わる。

「教育普及室」

インターン：三石恵莉、福田 京、江崎瑠璃子

期間：5月1日-2009年3月31日

指導：寺島洋子

内容：①建築をテーマとしたプログラム企画

②本館建設に関連する資料整理

「絵画・彫刻・版画素描室」

インターン：田代有甚

期間：4月21日-8月31日

指導：高梨光正

内容：当館所蔵作品(絵画・彫刻・素描)の美術史的研究、所蔵品カタログ編纂のための資料収集補佐

[絵画・彫刻・版画素描室]

インターン: 矢野ゆかり

期間: 4月17日～8月31日

指導: 大屋美那

内容: 展覧会準備、カタログ編集業務などの補佐のうち、イギリス近代美術の関する内容

7) 他組織との連携

■東京都立飛鳥高校課外授業への協力

日時: 6月13日(金)、10月24日(金)とFun with Collectionのプログラム 合計10時間以上

内容: Fun with Collection参加

参加者: 10名

■上野高校「奉仕」課外授業への協力

日時: 7月9日(水)、12月12日(金) / 15日(月) / 19日(金) / 20日(土) / 21日(日) 合計24時間

内容: 「絵でたのしむクリスマス」の補助作業

参加者: 5名

■東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻の教育・研究における連携・協力

期間: 4月1日～2009年3月31日

内容: 文化資源学研究専攻の一層の充実と、当該研究科の学生の資質向上を図り、相互の教育・研究の交流を促進した。

8) 出版物

■展覧会カタログ(*展覧会の欄参照)

■展覧会作品リスト

展覧会の概要と出品作品リストを含む無料配布の作品リスト

[カラー展] B4(二つ折り)

[ハンマースホイ展] B4(二つ折り)

[ルーヴル展] B4(二つ折り)

■ジュニア・パスポート

展覧会の入場券を兼ねた小・中学生を対象とした展覧会ガイド

[カラー展] A4(三つ折り)

[ハンマースホイ展] B4(二つ折り)

[ルーヴル展] 円形D 13 cm(三つ折り)

■ゼフェロス

当館の展覧会や教育プログラムなどの活動を広報する季刊(年4回)のニュースレター

2007年度: No.35～No.38 A3(三つ折り)

(寺島洋子・横山佐紀・藁谷祐子)

スタッフ・リスト

[教育普及室]

寺島洋子

横山佐紀

藁谷祐子

前園茂宏

佐藤厚子(客員研究員)

[ボランティアスタッフ]

一期: 安藤まりえ、石川佐知子、磯田暉子、井上直子、栗盛苑子、里広江、柴田若菜、白田詠子、鈴木由紀、長井靖子、檜谷錦子、平賀恵美、別所恵代、三好美智子、横畠ミサコ

二期: 新井智子、伊藤敬子、小川 滋、小竿真紀、澤野曠一、谷口武教、寺嶋直子、中野恵子、中村宏美、橋本典子、畑中たまき、浜田明美、福良恵子、文屋信男、前田直哉、道岡千穂、森保裕恵、山本三津江、吉田文子

1) Programs Related to the Permanent Collection

■Fun with Collection

The Fun with Collection program this year was entitled *The Joy of Seeing and Knowing: Religion, Artists, and Conservation* (See Exhibition Report for details).

<Religion's Role in the Arts>

"Gallery Talks: On Saints and the Bible"

Focusing on biblical stories and the lives of the saints, the lecturer introduced the main religious themes found in various art works.

1) August 5 (Tue.); 8 (Fri.)

2) August 12 (Tue.); 15 (Fri.)

*Talks are held at 11:00 - 12:00 and 14:00 - 15:00 each day

Lecturers: 1) Mutsuki Iwaya (Graduate Student, Tokyo University of the Arts)

2) Hiroyo Hakamata (Graduate Student, Tokyo University of the Arts)

Fee: Admission fee to the Collection Exhibition

Participants: 30

<The Artist's Role in Art>

"Italian Renaissance Painters, their Patrons and Society"

August 2 (Sat.) 14:00 - 15:30

Lecturer: Michiaki Koshikawa (Associate Professor, Tokyo University of the Arts)

Fee: free of charge

Participants: 67

"Matisse and Picasso"

August 30 (Sat.) 14:00 - 15:30

Lecturer: Naoko Seki (Chief curator of the Museum of Contemporary Art, Tokyo)

Fee: free of charge

Participants: 71

<Conservation's Role in the Arts>

"Tapestry Conservation"

Methods of restoring textile works, taught through lectures with demonstrations.

July 19 (Sat.) 13:30 - 15:30

Target: over 13 years-olds

Lecturer: Mie Ishii (Restorer)

Fee: free of charge

Participants: 20

"Tips for Showcasing Watercolors in Fascinating Ways: Learn more about paper"

The nature of paper was taught, to find out ways of making your drawing look more attractive.

August 14 (Thu.) 11:00 - 16:00

Target: High school students

Lecturer: Masami Sakamoto (Restorer, Lecturer at Tohoku University of Arts and Design)

Fee: free of charge

Participants: 12

"Paper Conservation"

Methods of restoring works on paper was taught through lectures with

demonstrations.

August 16 (Sat.) 13:30 - 15:30

Target: over 13 years-olds

Lecturer: Masami Sakamoto (Restorer, Lecturer at Tohoku University of Arts and Design)

Fee: free of charge

Participants: 17

■ FUN DAY

A two-day program consisting of a variety of events and free access to the Permanent Collection Galleries held to encourage those who normally don't visit the museum to venture inside for the first time.

Dates: September 20 (Sat.) and 21 (Sun.) 9:30 - 17:30

Programs:

- a. Architectural tour
- b. Gallery Talks "One Work in the Permanent Collection Galleries"
- c. Photo service
- d. Puzzle
- e. Forecourt Concerts
- f. Volunteer Staff Corner

Participants: September 20: 1,128; September 21: 1,407

■ Christmas Program

"Christmas Carols"

From carols sung in churches in the Christmas season to popular songs, this acapella concert featured a range of festive Christmas songs.

December 20 (Sat.) and 21 (Sun.) 12:40 - 13:20 15:40 - 16:20

Organizer: Nanako Nishiyama (Tokyo University of the Arts)

Musicians: Chihiro Sue, Megumi Tanihara (sop.), Haruna Yamazaki, Kanako Sakaue (alt.), Takahiro Omata, Ken Tanaka (ten.), Toru Kaku (b.)

Fee: free of charge

Participants: 400

"Enjoying Christmas through Paintings"

Using quizzes and creative projects, participants enjoyed learning about a painting of angels.

December 20 (Sat.) and 21 (Sun.) 10:00 - 11:30 14:00 - 15:30

Target: Children aged 6 - 10 and accompanying adults

Fee: free of charge

Participants: 62

2) Programs Related to Special Exhibitions

■ Lectures

All 14:00 - 15:30, Auditorium, free of charge

A series of lectures related to the exhibition "Venus of Urbino"

"Venus in Italian Literature and Those around Her"

April 12 (Sat.)

Lecturer: Kazuaki Ura (Associate Professor, Tokyo University)

Participants: 125

"From *Olympia* to *Venus of Urbino*: Modern Painting and Tradition"

April 19 (Sat.)

Lecturer: Atsushi Miura (Professor, Tokyo University)

Participants: 149

"Venus as Portrayed in Renaissance Art: Focusing on *Venus of Urbino*"

May 10 (Sat.)

Lecturer: Shinsuke Watanabe (Curator, NMWA)

Participants: 103

A series of lectures related to the exhibition "Corot"

"Corot: A Musical Conception of Painting"

June 14 (Sat.)

Lecturer: Vincent Pomarède (Senior Curator, Director of the Department of Paintings, Musée du Louvre), Akiya Takahashi (Director, Mitsubishi Ichigokan Museum, Tokyo; Guest Researcher, NMWA)

Participants: 124

"Corot and the Japanese: History of Japan's Reception of Corot and Collection Activities in Japan"

July 6 (Sun.)

Lecturer: Yoichiro Ide (Professor, Tokyo Junshin Women's College)

Participants: 102

"Corot: The Embodiment of 19th Century Art"

July 27 (Sun.)

Lecturer: Akiya Takahashi (Director, Mitsubishi Ichigokan Museum, Tokyo; Guest Researcher, NMWA)

Participants: 135

"The Figure Paintings by the Landscape Painter Corot"

August 3 (Sun.)

Lecturer: Yukiko Oki (Instructor, Teikyo Heisei University)

Participants: 134

A series of lectures related to the exhibition "Vilhelm Hammershøi"

"Hammershøi's Influence on the Films of Carl Theodor Dreyer"

September 30 (Tue.)

Lecturer: Anne-Birgitte Fonsmark (Director of the Ordrupgaard Museum, Copenhagen)

Participants: 86

"Hammershøi and Symbolism"

October 4 (Sat.)

Lecturer: Felix Krämer (Chief Curator of the 19th Century and Classic Modern Painting and Sculpture Collection, Städel Museum, Frankfurt am Main)

Participants: 120



"Nineteenth Century Denmark: As Told by the Woman in the Black Dress"

October 22 (Sat.)

Lecturer: Uta Tanabe (Associate Professor, Research Institute for World Languages, Osaka University)

Participants: 141

A series of lectures related to the exhibition "The Louvre"

"Revolution in a Classicist Age: For a New 'Golden Age'"

February 28 (Sat.), 2009

Lecturer: Blaise Ducos (Curator, Painting Department, Louvre)

Participants: 96

"Asian Goods that Made their Way to 17th Century Europe"

March 7 (Sat.), 2009

Lecturer: Masashi Haneda (Professor, Tokyo University)

Participants: 90

■ Slide Talks

All 18:00 - 18:40, Lecture Hall, free of charge

Related to the exhibition "Venus of Urbino"

April 11 (Fri.), 25 (Fri.), May 9 (Fri.)

Speaker: Shinsuke Watanabe (Curator, NMWA)

Total participants: 353

Related to the exhibition "Corot"

June 20 (Fri.), July 11 (Fri.), 25 (Fri.), August 8 (Fri.), 22 (Fri.)

Speaker: Nobuko Suzuki (Graduate School of Tokyo University of the Arts)

Total participants: 565

Related to the exhibition "Vilhelm Hammershøi"

October 10 (Fri.), 24 (Fri.)

Speaker: Naoki Sato (Curator, NMWA)

November 7 (Fri.), 21 (Fri.)

Speaker: Kenji Yorozya (Graduate School of Osaka University)

Total participants: 382

Related to the exhibition "The Louvre"

March 6 (Fri.), 27 (Fri.)

Speaker: Yasuyuki Takashiro (Graduate School of Keio University)

Total participants: 242

■ Concert

Related to the exhibition "Corot"

"Corot's Musical Taste"

Corot loved music and musical instruments often appear in his paintings. Focusing on works for the mandolin and harp, this concert presented museum from the time of Corot.

July 10 (Thu.) 18:00 - 20:00, Lobby of Special Exhibition Gallery

Organizer and Lecturer: Keiko Takii (Tokyo University of the Arts)

Assistant: Nanako Nishiyama (Tokyo University of the Arts)

Lighting Design: Haruki Kaito

Musicians: Tadashi Aoyama, Tomoko Ono (Mandolin), Akiko Iwaki (Harp), Morio Kitagawa (Flute), Yuko Hara (Viola)

Tickets: 1,500 yen

Participants: 100

■ Program for the Disabled

Special Viewing Session for the Corot Exhibition

After a 30-minute general explanation of the works in the Corot exhibition, visitors were allowed to freely enjoy the exhibition.

June 28 (Sat.) 18:00 - 20:00

With Support by: Mitsubishi Corporations, Inc.

Participants: 147

3) Family Program

The Family Program is a free program held on the 2nd and 4th Saturdays of every month, aiming at children aged 6 - 10 and accompanying adults. Two different programs, "Biju-tool" and "Doyo Bijutsu" (Saturday art workshop), are conducted by members of the Education Department staff and Volunteer Staff.

■ Biju-tool

Suspended due to the renovation of the New Wing.

■ Doyo Bijutsu (Saturday art workshop)

This program consists of art appreciation in the Museum Collection Galleries and creative activities in the workshop room. Three programs were run during this fiscal year.

"Let's play *Karuta* with Art"

After playing a *Karuta* game based on works in our permanent collection, families went to the exhibition room to look for the paintings depicted in the museum's *karuta* cards. The families created some verses which matched the paintings they chose. At the end, they shared their own *karuta* with others by reading out the verses they made. (The same program was repeated 6 times.)

April 12 (Sat.), 26 (Sat.), May 10 (Sat.), 24 (Sat.) 10:00 - 11:30, 14:00 - 15:30

Total participants: 105

"Ichi, Ni, San, Shi, Go! Rodin"

Participants relaxed by playing games that involved body movement. They then divided into several groups and posed as "an object" using their bodies and their imagination. After becoming both sculptor and sculpture, the whole group went to the galleries to look at Rodin's sculptures. (The same program was repeated 12 times.)

July 12 (Sat.), 26 (Sat.), August 9 (Sat.), 23 (Sat.), September 13 (Sat.), 27 (Sat.) 10:00 - 11:30, 14:00 - 15:30

Total participants: 204

"Bow-wow Wonderful Museum"

This program focused on dogs depicted in paintings at the museum. After enjoying a story about a dog in a painting, families went to the gallery to look for the dog in the story. They also looked at other dogs in other paintings. At the end, they created their own dog by using paper bags and other materials. (The same program was repeated 4 times.)

March 14 (Sat.), 28 (Sat.) 2009 10:00 - 11:30, 14:00 - 15:30

Total participants: 53

4) School Program

■ School Gallery Talk

This reservation-only program involved group tours of the Museum Collection Galleries, led primarily by Volunteer Staff members.

Participants:

Under age of 6: 28 (1 group)

Primary School (aged 7 to 12): 1,046 (25 groups)

Junior High School (aged 13 to 15): 788 (37 groups)

Over age of 16: 260 (12 groups)

Total participants: 2,122 (75 groups)

■ School Slide Talk

This program requiring reservations involved Education Department staff members presenting lectures explaining the works on display in the Museum Collection Galleries or special exhibitions. These talks were aimed at large-scale audiences and held in the lecture hall.

Participants:

Primary School (aged 7 to 12): 587 (7 groups)

Junior High School (aged 13 to 15): 172 (1 groups)

Over age of 16: 220 (6 groups)

Total participants: 979 (14 groups)

■ Museum Visit for Extracurricular Activity

These group visits involved middle school and high school students in coordination with their Integrated Courses at school. The Education Staff members guided these groups, and provided information regarding a curator's job, art works, and the art museum itself.

Participants:

Junior High School (aged 13 to 15): 44 (9 groups)

Over age of 16: 2 (2 group)

Total participants: 46 (11 groups)

■ Teachers' Program

This program has been designed for elementary, middle school, and high school teachers and other educational staff members. The program includes a brief overview of the exhibition's contents, discussion of a few works on display and free entry to the exhibition.

All 18:00 - 18:40, Lecture Hall, free of charge

Related to the exhibition "Venus of Urbino"

April 4 (Fri.)

Lecturer: Shinsuke Watanabe (Curator, NMWA)

Participants: 124 (Exhibition viewing only: 53)

Related to the exhibition "Corot"

June 27 (Fri.)

Lecturer: Megumi Jingaoka (Curator, NMWA)

Participants: 47 (Exhibition viewing only: 29)

Related to the exhibition "Vilhelm Hammershøi"

October 17 (Fri.)

Lecturer: Naoki Sato (Curator, NMWA)

Participants: 35 (Exhibition viewing only: 20)

■Teachers' Summer Seminars

July 31 (Thu.) 9:30 - 15:30, NMWA, Free of charge

Organized with Musashino City Study Group of Primary School and Junior High School Art Teachers' Study Group

Participants: 84

August 25 (Mon.) 9:30 - 17:00, National Museum of Modern Art, Tokyo, Crafts Gallery, Free of charge

Organized with Tozuken, the National Museum of Modern Art, Tokyo and the Museum of Contemporary Art, Tokyo.

Participants: 78

Other seminars

Total participants: 118 (7 groups)

5) Volunteer Activities

A Volunteer Program was established at the NMWA in 2004 and began operating in the latter half of 2004. The volunteer staff's activities have centered on Family Program and School Gallery Talk events. They have also participated in training sessions held throughout the year in order to acquire the knowledge and techniques necessary for their activities. In 2008, 19 new members joined our volunteer team, bringing the total number of volunteers to 34. The new members attended training sessions as preparation for their activities starting from 2009.

■Activities

Family Program (See "3) Family Program")

School Gallery Talk (See "4) School Program")

Others:

Made displays to help visitors learn about NMWA volunteer activities and introduced their accomplishments to visitors during the "FUN DAY 2008" event.

Conducted gallery talks for adults during the "FUN DAY 2008" event.

Assisted with creating and implementing the Christmas Program for families at the museum.

■Training and Meetings

April 19 (Sat.) Lecture / Presentation of new highlight courses for School Gallery Talk

June 12 (Thu.) Trial of Doyo Bijutsu program "Ichi, Ni, San, Shi, Go! Rodin"

September 4 (Thu.) Meeting on the up-coming event "FUN DAY"

October 16 (Thu.) Review of the activities implemented by the volunteers in the first half of 2008

November 7 (Fri.) Overview of upcoming training sessions and necessary paperwork for new volunteer staff members

November 14 (Fri.) Lectures "Flemish Old Master Paintings" by Atsushi Shinfuji and "French Paintings in the 19th Century" by Megumi Jingaoka

November 28 (Fri.) Lectures "Overview of the NMWA" by Masanori Aoyagi and "How to use the Research and Information Center" by Masako Kawaguchi

December 5 (Fri.) Lectures "Overview of Education Programs" by Yoko Terashima and "Education Programs related to Special Exhibitions" by Saki Yokoyama

December 19 (Fri.) Workshops on a Way of Seeing Art Works / Introduction of Art Card

January 9 (Fri.) Lectures "Italian Old Master Paintings" by Shinsuke Watanabe and "Paintings in the 20th century" by Hiroya Murakami

January 23 (Fri.) Lectures "Communication and Voice Projection" by Norio Ishizawa (NHK broadcaster) and "Information on Visitors at the Museum" by Ryo Saito (Kyoei Building Maintenance Company)

January 25 (Sun.) Lectures "Le Corbusier and the Main Building" by Yoshiyuki Yamana and "Le Corbusier and Modern Architecture in Japan" by Hiroshi Matsukuma

February 5 (Thu.) Lectures "Conducting Tours for Children" by Yoko Terashima and "Volunteer Activities at the Museum" by Yuko Waragai

February 12 (Thu.) Trial of Doyo Bijutsu program "Bow-wow Wonderful Museum"

February 18 (Wed.) Observation of School Gallery Talk (for new staff)

February 26 (Thu.) Trial of School Gallery Talk by new staff members

March 8 (Sun.) Meeting for all the volunteers to get acquainted

March 14 (Sat.) Observation of Doyo Bijutsu program (for new staff)

March 28 (Sat.) Observation of Doyo Bijutsu program (for new staff)

Review of School Gallery Talks: July 25 (Fri.)

6) Internships

As part of its mission of developing human resources in areas related to western art and also as a way to further garner and broaden understanding of the museum's activities, the museum invites the participation of interns at the graduate student level and higher. Under the direction of a staff member, these interns help with surveys of museum art works and assist with the planning of exhibition-related and educational programs, with each intern taking part in hands-on work in their own specific area of specialization.

[Education]

Interns: Eri Mitsuishi, Kyo Fukuda, Ruriko Esaki

Term: May 1 - March 31, 2009

Supervisor: Yoko Terashima

Training Program:

1. Program-making on the Main Building architecture.
2. Assisted with assembling resource materials on construction of the Main Building

[Curatorial]

Intern: Yujin Tashiro

Term: April 21 - August 31

Supervisor: Mitumasa Takanashi

Training Program: Assisted with assembling resource materials of the works in the collections and compiling a catalogue.

Intern: Yukari Yano

Term: April 17 - August 31

Supervisor: Mina Oya

Training Program: Assisted with the preparation of the exhibition "Frank Brangwyn"

7) Cooperation with Other Institutions

Off-campus Course for the Tokyo Metropolitan Asuka and Oizumi Sakura Senior High Schools

June 13 (Fri.), October 24 (Fri.) and some dates from the programs of Fun with Collection.

Participants: 10

Tokyo Metropolitan Ueno High School Volunteer

July 9 (Wed.), December 12 (Fri.), 15 (Mon.), 19 (Fri.), 20 (Sat.), 21 (Sun.)

Helped with the Christmas program.

Participants: 5

Cooperation with the Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo

Term: April 1, 2008 - March 31, 2009

This program sought to deepen the understanding of Cultural Materials Research specialists in this program and carry out mutual exchange on research and education.

8) Publications

■Exhibition brochures

"Corot"

"Vilhelm Hammershøi"

"The Louvre"

■Junior Passports

Exhibition guide for primary school and junior high school students:

"Corot"

"Vilhelm Hammershøi"

"The Louvre"

■Zephyros

NMWA Newsletter, No. 35 - No. 38

(Yoko Terashima, Saki Yokoyama, Yuko Waragai)

Staff List

Education Department:

Yoko Terashima

Saki Yokoyama

Shigehiro Maezono

Yuko Waragai

Atsuko Sato (Guest Researcher)

Volunteer Staff:

Tomoko Arai, Marie Ando, Sachiko Ishikawa, Kiiko Isoda, Takako Ito, Naoko Inoue, Shigeru Ogawa, Maki Ozao, Enko Kurimori, Hiroe Sato, Koichi Sawano, Wakana Shibata, Eiko Shiota, Yuki Suzuki, Takenori Taniguchi, Naoko Terashima, Yasuko Nagai, Keiko Nakano, Hiromi Nakamura, Noriko Hashimoto, Tamaki Hatanaka, Akemi Hamada, Kaneko Hinotani, Megumi Hiraga, Keiko Fukura, Nobuo Bunya, Hisayo Bessho, Naoya Maeda, Chiho Michioka, Michiko Miyoshi, Hiroe Moriyasu, Mitsue Yamamoto, Misako Yokohata, Ayako Yoshida

FUN DAY 2008 セイビまるごとお楽しみ!
FUN DAY 2008 Let's Enjoy all of the NMWA!!

日時:2008年9月20日(土)、21日(日)
主催:国立西洋美術館
場所:本館、新館(常設展)

Dates: September 20 (Sat.) and 21 (Sun.), 2008
Organizer: National Museum of Western Art
Venue: Museum Collection Galleries (Main Building and New Wing)



FUN DAY 2008は昨年に引き続いて行なわれた、国立西洋美術館無料開放プログラムである。

その目的は、すでに当館を知っている人ばかりでなく、当館や美術館にあまり足を運ぶことのない人たちに、当館のコレクションや活動を知ってもらうことにある。本年のFUN DAYは、OPEN museumプログラムの一環として行なわれた。

FUN DAY 2年目にあたる本年は、昨年同様、当館の常設作品を楽しむためのプログラムの実施に加え、ボランティアスタッフ2期生の募集の時期と重なったことから、ボランティアスタッフの活動紹介コーナーを設けた。

当日は、入館者全員に入場券代わりのマグネットバッジを配布し、「美術館を楽しむプログラム」として、以下の6プログラムを行なった。1) 建築ツアー(建築関係者による、本館をめぐるツアー)、2) ギャラリートーク「常設展、この1点」(ボランティアスタッフが常設作品1点について行なう10分間のトーク)、3) 常設展クイズ(常設展の作品1点を取り上げたクイズシート、解説つき)、4) フォトサービス(プロのカメラマンによる前庭での記念撮影)、5) パズル(常設作品を拡大し、パズルにしたもの。制限時間内での完成をめざす)、6) 前庭コンサート(『地獄の門』の前でのコンサート)。建築ツアーは事前に何度も勉強会を行なった上で実施され、また建築関係の専門家によるツアーだったこともあり、非常に好評であった。

また、ボランティア紹介コーナーでは、これまでボランティアスタッフが行なってきたファミリープログラムやクリスマス・プログラムを紹介するボードを作成し、プログラムで実際に使用したワークシートなども手にとって見るができるよう展示を行なった。ボランティアスタッフによって貸出が行なわれている「びじゅつる」も一部展示したところ、来館した親子や子どもに人気であった。当館におけるボランティア活動を幅広く紹介する良い機会となった。

残念ながら台風の時期にあたったために天候に恵まれず、昨年よりも来館者数は少なかったが、本館、新館共に開館していた昨年とは異なり本館のみの開館であったため、適切な来館者数であったと考えている。本年のFUN DAYはOPEN museumプログラムのひとつとなったため、パズル、フォトサービスなどエプソン、電通のご協力を得て昨年よりもさらに充実したプログラムを行なうことができた。

た。今後も、さらに充実したプログラムを行なっていきたい。

(横山佐紀)

企画:国立西洋美術館教育普及室

協力:フィルハーモニア東京

Fun Day 2008, continuing from last year, was a program of free days at the NMWA.

The aim of this program was to attract not only those who know the museum, but also those who don't often visit museums, ours included, and make them aware of our collections and programs. This year's Fun Day was run as one element of the OPEN museum program.

This year marked the 2nd year of the Fun Day program, and as last year, programs were designed to encourage the enjoyment of the Permanent Collection Galleries. Coinciding with the search for a second round of Volunteer Staff members, a booth was set up on Fun Days to introduce the activities of the museum's volunteer staff.

On the Fun Days, each person entering the museum was given a magnetic badge rather than an entrance ticket, and the following six "Programs for Enjoying the Museum" were held:

- 1) Architectural tours (tour of the Main Building by architecturally involved tour guides)
- 2) Gallery Talks "One Work in the Permanent Collection Galleries" (volunteers introduced one art work in the galleries in 10 minute talks)
- 3) Permanent Collection Galleries Quiz (quiz sheets with explanations about one work in the permanent collection)
- 4) Photo Service (commemorative photographs taken in the Museum Forecourt by a professional photographer)
- 5) Puzzles (a photo of a work in the museum collection was enlarged and made into a jigsaw puzzle. The goal was to assemble the puzzle within a set time period.)
- 6) Concert in the Forecourt (Concert in front of *The Gates of Hell*)

The architecture tours were extremely popular because they were held after many advance study meetings, and were conducted by architectural specialists.

Further, the Volunteer Activities Corner displayed boards presenting the previous activities of the volunteer staff, such as Family Programs



and the Christmas Program, and the Corner also displayed the actual worksheets and other materials used in programs. A section of the Bijutool program operated by the Volunteer staff was also displayed, and it was particularly popular with families and young visitors. This corner provided a good opportunity for an introduction of the broad range of volunteer activities at the NMWA.

Unfortunately, this year's Fun Days were marred by typhoon weather, and this meant fewer participants than the previous year. However, this year only the Main Building was opened, unlike last year when both the New Wing and the Main Building were open, and thus the number of visitors was actually appropriate for the scale of space available.

This year's Fun Day was part of the OPEN museum programs and thus the puzzles, photo service and other aspects were carried out with the support of Epson and Dentsu. This meant that the programs were more fully realized than they had been in the past. We hope to work with these partners to present even better and more developed programs in the future.

(Saki Yokoyama)

Planning: NMWA Education Department
In cooperation with: Philharmonia Tokyo

OPEN museum

国立西洋美術館は平成19年度より、より多くの人に当館を楽しんでもらい、かつより開かれた美術館を目指すプロジェクトOPEN museumを発足し、オフィシャル・パートナーとしてセイコーエプソン株式会社およびエプソン販売株式会社から支援を受けている。

OPEN museumとは、多様な機関や施設とのつながりを大切にし、ながら、美術を通して人々が出会う開かれた美術館を目指すプロジェクトである。その基本コンセプトは、さまざまな美術の見かたや楽しみかたを提供し、多様なものの見かたや考えかたに接することのできる場を人々に提供するというものである。そのために、既存のプログラムを充実させつつ新たなメディアを取り入れ、ひとりでも家族でも、グループでも参加することのできるプログラムをOPEN museumプログラムとして昨年度より行なっている。

OPEN museumプロジェクト2年目にあたる20年度は、以下のプログラムを実施した。常設展を無料開放するFUN DAY 2008、常設展関連教育普及プログラム（ファミリープログラム“どようびじゅつ”）。詳細は該当項目を参照。以下同じ）、コロ展レクチャー・コンサート（7月10日）、「Museum Xmas in 国立西洋美術館 美術館でクリスマス」（11月28日－2009年1月4日）である。これらに加え、昨年に引き続き本館エントランスにおいて「映像ガイド」を常時上映したほか、大型作品パネルとして、《睡蓮》に替わり《サン＝トロペの港》を新たに掲出した。また、来館者サービスとして今年度より、常設展作品リスト（和文、英文）を展示替毎に作成・配布したほか、常設展作品をデザインしたミニミュージアムや、クリスマス期間にはグリーティングカードやメモビットを配布した。

本プロジェクトに対し、セイコーエプソン株式会社およびエプソン販売株式会社の支援を得ることで、所蔵作品に関連する新たな配布物を作成するなど、昨年よりもさらに充実した来館者サービスの実施が可能となった。それぞれのプログラムには多くの参加者があり、当館のコレクションや活動への認知を高めるために、たいへん有効であった。3年目となる来年度も、国立西洋美術館が人々により開かれた美術館となるよう、プログラムの更なる充実に努めたい。

（横山佐紀）

Starting in fiscal 2007, the OPEN museum project was developed by the NMWA with the aim of making the NMWA an all the more open and enjoyable museum for an ever-larger number of visitors. The project is supported by its official partners, Seiko Epson Corporation and Epson Sales Japan Corporation.

The OPEN museum project aims to make the art museum a place open to people encountering art and each other, all while honoring the connection with diverse organizations and facilities. This basic concept offers a variety of art work to enjoy and view, while providing people with a place where they can encounter a diverse array of viewpoints and philosophies on art works. To facilitate these goals, new media was introduced to existing programs, making this fiscal year's OPEN museum all the more involving, whether for individuals, family or group visitors.

The fiscal 2008 version of the OPEN museum project included the following programs. The Fun Day 2008 (days on which permanent collection galleries were open for free); educational programs related to permanent collection galleries, such as the family program Doyo Bijutsu (Saturday Art Workshop, for details see its descriptive page. The same applies for programs listed below.); Lecture-Concert held in conjunction with the Corot exhibition; and Museum Christmas at the NMWA (28 November to 4 January). In addition, continuing from last year, a Video Guide was played during opening hours, and a large-scale panel was displayed about *The Port of Saint-Tropez*, replacing last year's panel on *Water Lilies*. Starting this fiscal year, lists of works on display in the Permanent Collection Galleries (bilingual Japanese-English) were prepared and distributed to all visitors for each new installation of the galleries. Similarly, the mini-museum cutout guide designed from works in the permanent galleries was distributed, while Christmas cards and memo holders were distributed during the Christmas season.

Thanks to the support received from Seiko Epson Corporation and Epson Sales Japan Corporation, we were able to create new materials for distribution related to works in the collection, and provide an even more thorough service to visitors than possible in previous years. Each of the programs was well attended, and the programs have proved a very effective method of raising awareness of NMWA collections and activities. We hope to provide ever more developed programs next fiscal year, the third year of the program, inviting all the more people to consider the NMWA an open museum.

（Saki Yokoyama）

国立西洋美術館
open museum

Touch the Museum β — 映像と音でめぐる常設展

Touch the Museum (beta): Multimedia tour of the permanent collection

会期: 2009年2月9-14日

主催: 国立西洋美術館

Duration: 9 - 14 February 2009

Organizer: National Museum of Western Art



「Touch the Museum β — 映像と音でめぐる常設展」は、文化庁からの平成20年度委託業務に基づいて製作した音声・映像ガイドの実証実験である。

昨今、私たちの生活に欠かせないものとなった携帯電話をはじめとするモバイル機器は、近年ではさらに急速な多機能化を遂げたことで、とりわけ視聴覚コンテンツの流通と消費の形態を大きく変えつつある。とくにここ2、3年のあいだに、欧米の美術館・博物館では、iPhoneやNintendo DSといったモバイル端末を用いた新世代型の作品鑑賞ガイドへの関心が高まってきた。そもそも美術作品という視覚媒体を扱う場において、こうした変化に対して一定に敏感な反応があるのは、ある意味で当然のことかもしれない。かねてより美術館では、作品に関連する写真や映像資料を並置するような展示手法が模索されてきた。とはいえ、美術館において来館者個々の鑑賞を支援するための一般的なツールは、いまだ「音声ガイド（オーディオ・ツアー）」に留まっている。iPhoneなどを用いた鑑賞ガイドへの興味は、言語情報（音声）に特化した既存の鑑賞補助から、新たに視覚情報を中心とするそれへの移行を果たそうという意識を物語っている。

Apple社製iPod touchを利用した当館の「Touch the Museum」も、大きくはこのような潮流の中にある。実証実験では、40点の作品解説（音声と画像）と、12本のコーナー解説（動画と音声）、さらには本館コルビュジエ建築の解説（動画と音声）や音楽コンテンツなどを用意し、それらを独自の位置測位システムと連動させながら、鑑賞者が効率的にアクセスできるよう配置した。こうしたコンテンツは、絵の前で画像や映像を提供することの功罪について有識者との議論などを経たうえで、映像の教育的活用を専門としているNHKエデュケーショナルが製作したものである（たとえば、端末ばかりに鑑賞者の意識が集中するのではなく、彼らの視線が壁に掛けられた実作品と端末画面上に現われる映像とを自由に往還できるよう工夫を施した）。その結果、利用者の9割弱（回答数843）がガイドの内容を理解しやすかったと回答するなど、展示室への映像の導入は、事前の予想を遥かに上回る好評を得た。また、iPod touchを用いた第一の理由は、その操作性の高さにあったが、実験ではおよそ8割の利用者が、われわれの開発したアプリケーションの操作を容易だと答えた。まだ改善の余地はあるにせよ、機能面に関しても一定以上の有効性を認められたと言ってよい。

こうして、音声／言語から画像／映像への転換という意識の中、ネットワークとも切り結んだ新たな美術鑑賞ツールを探る試みとして、「Touch the Museum」は小さくない意味をもつのではないかと思う。
(新藤 淳)

コンテンツ製作: 株式会社NHKエデュケーショナル

システム開発: 有限会社シネティクス

Touch the Museum (beta) was the test version of an AV guide to the museum based on fiscal 2008 guidelines from the Agency for Cultural Affairs.

Mobile devices, such as the mobile telephones that seem to have become an essential feature of people's lives, have rapidly diversified in recent years, and these mobile devices have greatly shifted towards the functions of obtaining and consuming AV contents. Particularly in the last two to three years, interest has increased in western museums in which the iPhone, Nintendo DS and other mobile terminals are being used with a new generation of guide options for viewing art works. Needless to say, there has not been a uniform reaction to this change in the case of visual media such as art works. In addition, exhibition methods have been explored which involve the parallel presentation of photographs and video media related to art works. Thus said, however, the basic tool used to support the viewing experiences of the many different individuals who visit a museum is limited to an audio tour. The interest in a viewer's guide using the iPhone and other such devices is more than anything else a shift from aiding viewing through a special set of audio information, and shifting to a new guide form centered on visual information.

The *Touch the Museum* program using Apple iPod touch devices was part of this larger trend toward providing visual information. The beta version of the program involved 40 art work explanations (audio and still images), 12 corner area explanations (video and audio) and explanation (video and audio) of the Le Corbusier Main Building, along with some music contents. These different explanatory sections were accessed through a unique positioning system that allowed viewers effective access to the information. The content of the *Touch the Museum* guide was created by NHK Educational Corporation, a company that specializes in education video production, after consultation with specialists about the pros and cons of presenting either still images or moving images in front of the art works. Questions that arose included whether or not the viewer would concentrate solely on the terminal, and the production team employed various stratagems



to encourage the viewer's focus to move back and forth between the actual art work hanging on the wall and the image appearing on the terminal. According to our survey, just under 90 percent of the viewers (from a total answer pool of 843) answered that the guides' contents were easy to understand, and the introduction of video in the exhibition galleries was favorably received as having slightly increased their expectations regarding such devices. Further, the first reason for the use of the iPod Touch was its ease of use. During the tests, approximately 80 percent of users answered that it was easy to use the application we developed. Whether or not there was room for improvement, regarding functionality, it is good that effectiveness exceeding a certain standard was acknowledged.

Thus, in the awareness of switching from voice/words to image/video, the *Touch the Museum* program can be considered to be the first step towards finding a new art viewing tool that connects with the Internet. (Atsushi Shinfuji)

Contents production: NHK Educational Corporation
Application development: SYNETICS LTD.

展覧会貸出作品一覧 List of Loans

「田園讃歌 近代絵画に見る自然と人間」

(Songs in Praise of Rural Life: The Nature and Man Relationship in Modern Art)

2008年2月23日－4月6日 ひろしま美術館

2008年4月19日－6月1日 山梨県立美術館

P.1959-0123 レオン・オーギュスタン・レルミット《落穂拾い》cat.no.1-32, repr. color.

「マティスとボナール 地中海の光の中へ」

(Matisse et Bonnard. Lumière de la Méditerranée)

2008年3月15日－5月25日 川村記念美術館

2008年5月31日－7月27日 神奈川県立近代美術館 葉山

P.1996-0002 ビエール・ボナール《花》cat.no.84, repr. color.

「静かなる情熱 藤川勇造とロダンの美」

(Quiet Dynamism: Yuzo Fujikawa and the Art of Rodin)

2008年4月5日－5月18日 香川県立ミュージアム

S.1959-0027 オーギュスト・ロダン《鼻のつぶれた男》cat.no.1, repr. color.

S.1959-0026 オーギュスト・ロダン《花子の頭部》cat.no.8, repr. color.

「コレクション小企画展」

2008年6月14日－12月7日 大原美術館

P.1959-0196 ギュスターヴ・モロー《牢獄のサロメ》

「ヴィルヘルム・ハンマー スホイ展」

(Vilhelm Hammershøi)

2008年6月24日－9月7日 London, Royal Academy of Arts

P.2008-0003 ヴィルヘルム・ハンマー スホイ《ピアノを弾く妻イダのいる室内》cat.no.67, repr. color.

「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」

(John Everett Millais)

2008年8月30日－10月26日 Bunkamura ザ・ミュージアム

P.1975-0004 ジョン・エヴァレット・ミレイ《あひるの子》cat.no.53, repr. color.

「コレクション小企画展」

2008年9月1日－12月31日 Randers Museum (Denmark)

P.1965-0004 クロード・モネ《セーヌ河の朝》

「コロー 光と追憶の変奏曲」

(Corot: souvenirs et variations)

2008年9月13日－12月7日 神戸市立博物館

P.1959-0077 モーリス・ドニ《ヴィラ・メディチ、ローマ》cat.no.19, repr. color.

P.1959-0183 ビエール・オーギュスト・ルノワール《木かげ》cat.no.75, repr. color.

P.1970-0003 カミーユ・コロー《ナボリの浜の思い出》cat.no.109, repr. color.

「Happy Mother, Happy Children: 微笑みの太陽・母と子の詩」

2008年10月4日－12月14日 東京富士美術館

P.1986-0001 モーリス・ドニ《雌鳥と少女》cat.no.16, repr. color.

「線の巨匠たち——アムステルダム歴史博物館所蔵素描・版画展」

(The Connoisseur's Eye: Master Drawings and Prints from the Amsterdams Historisch Museum)

2008年10月11日－11月24日 東京藝術大学大学美術館

D.2001-0001 アドルフ・ムイユロン《自作エッチング「ヤン・シックス」を見るレンブラント》cat.no.62, repr. color.

「バチカンの名宝とキリシタン文化」

(Masterpieces from the Vatican Museums and Christian Culture in Japan)

2008年11月1日－2009年1月12日 長崎歴史文化博物館

P.1998-0002 カルロ・ドルチ《悲しみの聖母》cat.no.224, repr. color.

「セザンヌ主義：父と呼ばれる画家への礼讃」

(Homage to Cézanne: His Influence on the Development of Twentieth Century Painting)

2008年11月15日－2009年1月25日 横浜美術館

P.1978-0005 ボール・セザンヌ《葉を落としたジャ・ド・ブッフアンの木々》cat.no.75, repr. color.

「ドーミエ 人間喜劇」

(Daumier and the Human Comedy)

2008年11月29日－12月21日 伊丹市立美術館

P.1984-0001 オノレ・ドーミエ《観劇》

「クロード・モネ《印象、日の出》展」

(Claude Monet [Impression, soleil levant])

2008年12月23日－2009年2月8日 名古屋市美術館

P.1959-0149 クロード・モネ《波立つブルヴィルの海》cat.no.11, repr. color.

P.1959-0166 カミーユ・ピサロ《冬景色》cat.no.22, repr. color.

「影」

(La Sombra)

2009年2月10日－5月17日 Museo Thyssen-Bornemisza, Madrid

P.1959-0147 クロード・モネ《並木道(サン＝シメオン農場の道)》cat.no.55, repr. color.

「フランス絵画の19世紀——アカデミズムから印象派へ」

(La peinture française du XIXe siècle: académisme et modernité)

2009年3月6日－5月31日 島根県立美術館

2009年6月12日－8月31日 横浜美術館

P.1996-0001 ギュスターヴ・クールベ《眠れる裸婦》cat.no.38, repr. color. (島根・横浜)

P.1959-0165 カミーユ・ピサロ《立ち話》cat.no.66, repr. color. (島根のみ)

「肖像の100年——ルノワール、モディリアーニ、ピカソ」

(A Century of Portraiture: Renoir, Modigliani, Picasso and other artists from the Collection)

2009年3月14日－6月21日 ボーラ美術館

P.1959-0111 ジャン＝ジャック・エンネル《婦人像》cat.no.22, repr. color.

新収作品一覧 List of New Acquisitions

[絵画]

カルロ・インノチェンツォ・カルローネ [1686-1775]

《聖フェリックスと聖アダウトゥスの栄光》

1759-61年
油彩、カンヴァス
90×120 cm

Carlo Innocenzo Carbone [1686-1775]
The Glorification of St. Felix and St. Adauctus

1759-61
Oil on canvas
90×120 cm
P.2008-0001

ウジェーヌ・カリエール [1849-1906]

《自画像》

1895-1900年頃
油彩、カンヴァス
42×33 cm

Eugène Carrière [1849-1906]

Self-Portrait

c.1895-1900
Oil on canvas
42×33 cm
P.2008-0002

ヴィルヘルム・ハンマー・スホイ [1864-1916]

《ピアノを弾く妻イダのいる室内》

1910年
油彩、カンヴァス
76×61.5 cm

Vilhelm Hammershøi [1864-1916]
Interior with Ida Playing the Piano

1910
Oil on canvas
76×61.5 cm
P.2008-0003

ウィリアム＝アドルフ・ブグロー [1825-1905]

《少女》

1878年
油彩、カンヴァス
45.5×38 cm

William Adolphe Bouguereau [1825-1905]
Little Girl

1878
Oil on canvas
45.5×38 cm
P.2008-0004

[版画]

イスラエル・ファン・メッケネム [1440/45-1503]

《三王礼拝》

エングレーヴィング
267×184 mm

Israhel van Meckenem [1440/45-1503]

The Adoration of the Magi

Engraving

267×184 mm
G.2008-0001

イスラエル・ファン・メッケネム [1440/45-1503]

《不釣り合いなカップル》

1496年頃
エングレーヴィング
161×108 mm

Israhel van Meckenem [1440/45-1503]
The Ill-Matched Couple

c.1496
Engraving
161×108 mm
G.2008-0002

MZの画家（おそらくマテウス・ツァジナー）

《恋人たち（抱擁）》

1500年頃
エングレーヴィング
147×122 mm

Meister MZ (Matthäus Zasinger)
Couple of Lovers (The Embrace)

c.1500
Engraving
147×122 mm
G.2008-0003

アルブレヒト・デューラー [1471-1528]

《「聖母伝」：聖母の賛美》

1501-02年頃
木版
296×213 mm

Albrecht Dürer [1471-1528]

《The Life of the Virgin》: *The Glorification of the Virgin*

c.1501-02
Woodcut
296×213 mm
G.2008-0004

アルブレヒト・デューラー [1471-1528]

《「聖母伝」：聖母の婚約》

1504-05年頃
木版
295×207 mm

Albrecht Dürer [1471-1528]

《The Life of the Virgin》: *The Betrothal of the Virgin*

c.1504-05
Woodcut
295×207 mm
G.2008-0005

アルブレヒト・アルトドルファー [1480頃-1538]

《森の中の恋人たち》

1511年
エングレーヴィング
135×100 mm

Albrecht Altdorfer [c.1480-1538]
Pair of Lovers in the Forest

1511
Engraving
135×100 mm

G.2008-0006

アウグスティン・ヒルシュフォーゲル [1503-1553]

《岩山に挟まれた川のある風景》

1546年
エッチング
139×168 mm

Augustin Hirschvogel [1503-1553]
River Landscape with Rocks at Left and Right

1546
Etching
139×168 mm
G.2008-0007

メルヒオール・ロルヒ [1527頃-1588以降]

《十字架の男（ハマン）》

1550年
エングレーヴィング
165×97 mm

Melchior Lorch [c.1527- after 1588]
A Crucified Man (Haman)

1550
Engraving
165×97 mm
G.2008-0008

オラツィオ・スカラベッリ [1589年頃活動]

《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」：第1の入場門、ボルタ・デル・プラート》

1589年
エッチング、28点連作
249×338 mm

Orazio Scarabelli [active c.1589]
《Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine》: *First Entry. Porta del Prato*

1589
Etching from a set of 28
249×338 mm
G.2008-0009

オラツィオ・スカラベッリ [1589年頃活動]

《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」：第2の入場門、ボルタ・アル・カッラーイア》

1589年
エッチング、28点連作
246×348 mm

Orazio Scarabelli [active c.1589]
《Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine》: *The Second Entry Arch. Over the Porta al Carraia*

1589
Etching from a set of 28
246×348 mm
G.2008-0010

オラツィオ・スカラベッリ [1589年頃活動]

《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」：第4の

入場門、ドゥオーモのファサードの装飾》

1589年
エッチング、28点連作
267×347 mm

Orazio Scarabelli [active c.1589]
「Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine」: *The Fourth Entry Arch. Decorations for the Façade of St. Maria de Fiore*

1589
Etching from a set of 28
267×347 mm
G.2008-0011

オラツィオ・スカラベッリ[1589年頃活動]
《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」: 第5の入場門、カント・デ・ビスケリ》

1589年
エッチング、28点連作
246×342 mm

Orazio Scarabelli [active c.1589]
「Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine」: *The Fifth Arch. Canto di Bischeri*

1589
Etching from a set of 28
246×342 mm
G.2008-0012

オラツィオ・スカラベッリ[1589年頃活動]
《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」: 第7の入場門、パラツォ・ヴェッキオのファサード》

1589年
エッチング、28点連作
242×345 mm

Orazio Scarabelli [active c.1589]
「Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine」: *The Seventh Arch. attached to the Façade of the Palazzo Vecchio*

1589
Etching from a set of 28
242×345 mm
G.2008-0013

オラツィオ・スカラベッリ[1589年頃活動]
《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」: サンタ・クローチェ広場のトーナメント》

1589年
エッチング、28点連作
241×343 mm

Orazio Scarabelli [active c.1589]
「Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine」: *The Joust on the Piazza Santa Croce*

1589
Etching from a set of 28
241×343 mm
G.2008-0014

作者不詳

《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」: ピッティ宮の中庭》

1589年
エッチング、28点連作
236×331 mm

Anonymous

「Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine」: *The Pitti Palace Courtyard Equipped for Foot Combat*

1589
Etching from a set of 28
236×331 mm
G.2008-0015

オラツィオ・スカラベッリ[1589年頃活動]
《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」: ピッティ宮中庭における模擬海戦》

1589年
エッチング、28点連作
247×358 mm

Orazio Scarabelli [active c.1589]
「Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine」: *Naumachia in the Courtyard of the Palazzo Pitti*

1589
Etching from a set of 28
247×358 mm
G.2008-0016

エビファニーニオ・ダルフィアーノ[1591-1607活動]

《「トスカーナ大公フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚式」: ネプトゥスの凱行進》

1589年
エッチング、28点連作
243×336 mm

Epifanio d'Alfiano [active 1591-1607]
「Festivals for the Marriage of Grand Duke Ferdinand I of Tuscany and Christina of Lorraine」: *Triumphal Procession of Neptune in a Chariot, with Sea and River Gods, before Palazzo Pitti*

1589
Etching from a set of 28
243×336 mm
G.2008-0017

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (1) タイトルと献辞》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
115×256 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (1)

c.1643-46
Set of 12 etchings
115×256 mm
G.2008-0018

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (2) 川を渡る農婦》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
119×259 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (2)

c.1643-46
Set of 12 etchings
119×259 mm
G.2008-0019

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (3) 川を渡るふたりの騎士》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
117×257 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (3)

c.1643-46
Set of 12 etchings
117×257 mm
G.2008-0020

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (4) 遺跡を眺めるふたりの巡礼者》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
115×259 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (4)

c.1643-46
Set of 12 etchings
115×259 mm
G.2008-0021

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (5) 鹿狩り》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
112×257 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (5)

c.1643-46
Set of 12 etchings
112×257 mm
G.2008-0022

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (6) 網を担ぐ漁師》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
116×259 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (6)

c.1643-46
Set of 12 etchings
116×259 mm
G.2008-0023

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (7) 海岸の船》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
118×257 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (7)

c.1643-46
Set of 12 etchings
118×257 mm
G.2008-0024

ステーフアノ・デッラ・ベッラ[1610-1664]
《「さまざまな風景」: (8) 2隻のガレー船と2人のボート》

1643-46年頃
エッチング、12点連作
116×259 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (8)

c.1643-46
Set of 12 etchings
116×259 mm
G.2008-0025

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]
《「さまざまな風景」: (9) 早駆けするふたりの騎士》

1643-46年頃
エッチング, 12点連作
113 × 259 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (9)

c.1643-46
Set of 12 etchings
113 × 259 mm
G.2008-0026

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]
《「さまざまな風景」: (10) 風車》

1643-46年頃
エッチング, 12点連作
119 × 260 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (10)

c.1643-46
Set of 12 etchings
119 × 260 mm
G.2008-0027

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]
《「さまざまな風景」: (11) 羊飼いの》

1643-46年頃
エッチング, 12点連作
121 × 257 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (11)

c.1643-46
Set of 12 etchings
121 × 257 mm
G.2008-0028

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]
《「さまざまな風景」: (12) 素描家と羊飼いの》

1643-46年頃
エッチング, 12点連作
119 × 260 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Divers Paysages」: (12)

c.1643-46
Set of 12 etchings
119 × 260 mm
G.2008-0029

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]
《「軍隊のデッサン」: (1) 表紙》

1644年頃
エッチング, 12点連作
56 × 126 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (1)

c.1644
Set of 12 etchings
56 × 126 mm
G.2008-0030

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]
《「軍隊のデッサン」: (2) 城門の下の兵士》

1644年頃
エッチング, 12点連作
62 × 124 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (2)

c.1644
Set of 12 etchings
62 × 124 mm

G.2008-0031

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (3) 平地における大砲の運搬》

1644年頃
エッチング, 12点連作
61 × 125 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (3)

c.1644
Set of 12 etchings
61 × 125 mm
G.2008-0032

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (4) 山地に向かって大砲を運ぶ馬》

1644年頃
エッチング, 12点連作
60 × 124 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (4)

c.1644
Set of 12 etchings
60 × 124 mm
G.2008-0033

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (5) 川を渡る騎士、》

1644年頃
エッチング, 12点連作
60 × 124 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (5)

c.1644
Set of 12 etchings
60 × 124 mm
G.2008-0034

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (6) 前哨戦》

1644年頃
エッチング, 12点連作
61 × 123 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (6)

c.1644
Set of 12 etchings
61 × 123 mm
G.2008-0035

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (7) ふたりの兵士、》

1644年頃
エッチング, 12点連作
64 × 125 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (7)

c.1644
Set of 12 etchings
64 × 125 mm
G.2008-0036

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (8) 荷馬車》

1644年頃
エッチング, 12点連作
61 × 124 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (8)

c.1644
Set of 12 etchings
61 × 124 mm
G.2008-0037

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (9) 大砲と兵士たち》

1644年頃
エッチング, 12点連作
61 × 124 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (9)

c.1644
Set of 12 etchings
61 × 124 mm
G.2008-0038

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (10) 大砲に弾を装填する兵士たち》

1644年頃
エッチング, 12点連作
61 × 124 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (10)

c.1644
Set of 12 etchings
61 × 124 mm
G.2008-0039

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (11) 包囲した町への攻撃》

1644年頃
エッチング, 12点連作
59 × 124 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (11)

c.1644
Set of 12 etchings
59 × 124 mm
G.2008-0040

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《「軍隊のデッサン」: (12) 軍隊の入場》

1644年頃
エッチング, 12点連作
61 × 129 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
「Dessins de quelques troupes」: (12)

c.1644
Set of 12 etchings
61 × 129 mm
G.2008-0041

ステューファノ・デッラ・ベッラ [1610-1664]

《ポーランドの騎兵》

1648-50年頃
エッチング
185 × 191 mm

Stefano della Bella [1610-1664]
Polish Rider

c.1648-50
Etching
185 × 191 mm
G.2008-0042

リュカス・フォルステルマン [1595-1675] (ブ
リュエゲルの原画による)

《農民の喧嘩》

エッチング, エングレーヴィング

426×522 mm

Lucas Vorsterman [1595-1675] (after Pieter
Brueghel the Elder)

Peasants Fighting over a Game of Cards

Etching, engraving

426×522 mm

G.2008-0043

シャルル・メリヨン [1821-1868]

《ル・プチ・ボン》

1850年

エッチング、エングレーヴィング、薄緑色の紙

262×189 mm

Charles Meryon [1821-1868]

Le Petit Pont

1850

Etching, engraving, greenish paper

262×189 mm

G.2008-0044

シャルル・メリヨン [1821-1868]

《死体公示所》

1854年

エッチング、ドライポイント、シン・コレ

212×192 mm

Charles Meryon [1821-1868]

La Morgue

1854

Etching, drypoint, chine collé

212×192 mm

G.2008-0045

客員研究員・インターンシップ・スタッフ一覧
List of Guest Curators / Internship / Staff

[学芸課]

幸福 輝 上席主任研究員
村上博哉 学芸課長(絵画第二室長兼任)
佐藤直樹 主任研究員(研究企画室長)
高梨光正 主任研究員(絵画第一室長)
陳岡めぐみ 研究員(絵画第二室)
新藤 淳 研究員(絵画第一室)
大屋美那 主任研究員(版画素描室長)
渡辺晋輔 主任研究員(版画素描室)
寺島洋子 主任研究員(教育普及室長)
横山早紀 研究員(教育普及室)
川口雅子 主任研究員(資料センター長)
河口公男 主任研究員(保存修復室長)

[秘書]

金澤清恵

[研究企画室研究補佐員]

飯塚 隆(古代ローマ帝国の遺産展)

[研究資料センター]

研究補佐員:高橋悦子、門田園子、澤 里佳、一瀬あゆみ
アルバイト:佐藤志緒、足立純子、比戸奈津子、窪内美緒、糸 和沙
科研費(「国立西洋美術館所蔵作品データベース」)アルバイト:袴田紘代、安永麻里絵、井深優子、安藤美奈、玉井貴子、榎田倫広

[保存修復・科学室研究補佐員]

高嶋美穂、内田香里

[教育普及室研究補佐員]

前園茂宏、薬谷祐子

[展覧会アルバイト]

コロー展:鈴木伸子、佐藤奈々子、袴田紘代
ハンマースホイ展:近藤真彫、萬屋健司
ルーヴル展:高城靖之

[版画素描室アルバイト]

大森弦史

[客員研究員]

マーサ・マクリントク
業務内容:国立西洋美術館が行なう情報、広報事業における英語表記の助言、指導
委嘱期間:H20.4.1~H21.3.31

佐藤厚子
業務内容:美術館教育に関する調査研究
委嘱期間:H20.4.1~H21.3.31

瀧井敬子
業務内容:「コロー」展コンサート企画協力
委嘱期間:H20.6.1~H20.8.31

山名善之
業務内容:国立西洋美術館本館建築調査
委嘱期間:H20.4.1~H21.3.31

松隈 洋
業務内容:国立西洋美術館本館建築調査
委嘱期間:H20.4.1~H21.3.31

中村るい
業務内容:キクラデス像の調査研究
委嘱期間:H20.4.1~H21.3.31

高橋明也
業務内容:「コロー展」に関わる調査研究
委嘱期間:H20.4.1~H20.9.30

小熊佐智子
業務内容:戦前における松方コレクションの受容史
委嘱期間:H20.4.1~H21.3.31

塚田全彦
業務内容:西洋美術作品の保存・科学
委嘱期間:H20.4.1~H21.3.31

研究活動 Research Activities

大屋美那 / Mina OYA

〔展覧会企画・構成・監修〕

「コロ展」(2008年6月14日-8月31日)カタログ編集および展示補助
「フランク・ブラングイン展」、2010年開催予定

〔調査活動〕

収蔵作品調査:

「ロダンの大理石彫刻に関する調査」ロダン美術館、フランス国立美術史研究所(パリ)ほか、2008年9月22日-2009年3月14日

「松方コレクションのブールデル彫刻に関する調査」ブールデル美術館、フランス国立美術史研究所(パリ)、2008年9月22日-2009年3月14日

展覧会のための調査:

「フランク・ブラングイン展」作品および文献調査、バーミンガム美術館、ロチデール美術館、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、英国図書館(イギリス)、2008年9月15-20日

情報・資料収集:

「松方コレクションおよびその返還に関する資料調査、収集」フランス国立美術館資料室、フランス国立美術館図書室(パリ)、2008年9月22日-2009年3月14日

〔版画素描室の活動〕

作品購入に関する業務

版画素描データベース管理

閲覧者対応

〔その他〕

フランス国立美術史研究所客員研究員、2008年9月22日-2009年3月14日

河口公男 / Kimio KAWAGUCHI

〔保存修復処置〕

絵画修復処置:

アレクサンドロ・ベドリ・マツォーラに帰属《ヴィーナスとキューピッド》

当該作品は07年1月に処置を開始し、08年度に及んで完了していません。

彫刻修復処置:

レオナルド・ピストルフィ《死の花嫁たち》

保存状態調査、洗浄、処置台製作、ブロンズ額縁铸造用型取り

額縁修復:

ヴェロネーゼ作品額縁(解体修復)

当該作品は07年11月より、08年6月に完了

〔保存処置(免震すべり板、取り付け金物、台座石製作)〕

ロダン作品4点

ブールデル作品2点

〔作品貸出業務〕

(額装改良、振動防止、マイクロクライメイトボックスの製作など)

エドワード・ムンク《雪中の鉱夫たち》

ヴィルヘルム・ハンマースホイ《ピアノを弾く妻イーダのいる室内》

カルロ・ドルチ《悲しみの聖母》

他に絵画作品9点

版画1点

〔調査研究〕

愛知工業大学 耐震実験センター 青木教授との共同調査研究「免震滑り板の加震実験」基礎調査、実験装置製作

〔特許申請〕

特許申請「簡易免震滑り板」再審査請求

〔招待発表〕

“Protecting The Gate of Hell: Seismic Protection of Monumental Bronze Casting”, National Technical University of Athens, J. Paul Getty Museum colloquium project, 2 June - 4 June 2008

〔研修〕

短期在外研修(30日間)

ロンドン大学コートールド研究所にてカンヴァス繊維の伸縮劣化の調査

イギリス、オランダ、ベルギー、フランスにて、フランドル、ネーデルラント静物画の技法調査

〔業務出張〕

中国福建省アモイ、福州で彫刻台座製品検査

愛知工業大学「耐震実験センター10周年記念シンポジウム」

多摩美術大学 野口康氏講演会「紅梅白梅図の金箔について」

〔工事関係〕

新館空調改修に伴う業務

川口雅子 / Masako KAWAGUCHI

〔情報資料室の活動〕

研究資料センターの公開運用

国立西洋美術館所蔵作品データベースの英語版公開、バーマリンク機能追加

所蔵作品データ整備

資料コーナーの公開運用

ファイルサーバー、ドメイン管理等

開館50周年記念誌の準備

〔研究活動〕

記事:

「第74回国際図書館連盟ケベック大会報告」『アート・ドキュメンテーション通信』79号、2008年10月、p.11

「フランス所在の国立西洋美術館関係資料調査記」『アート・ドキュ

〔調査活動〕

研修:

国文学研究資料館平成20年度アーカイブズ・カレッジ長期コース受講(分割履修)

他機関調査:

フランス外務省アーカイブ分館(ナント外交資料センター)、フランス国立美術史研究所アーカイブズ、ル・コルビュジエ財団アーカイブズ

〔外部資金〕

科学研究費補助金研究成果公開促進費(研究成果データベース)
〔国立西洋美術館所蔵作品データベース〕

科学研究費補助金基盤研究海外学術調査「国立西洋美術館を中心としたル・コルビュジエ作品の文化遺産保存活用に関する調査研究」(研究代表者:東京理科大学 山名善之准教授)

〔その他の活動〕

学会参加:

第74回国際図書館連盟ケベック大会(2008年8月10-14日)

北米日本研究資料調整協議会主催 国際シンポジウム「ジャパン・イメージ 海外日本研究のための画像利用事情」(2008年6月23日、国際文化会館講堂)

全国美術館会議情報・資料研究部会幹事

玉川大学非常勤講師

幸福 輝/Akira KOFUKU

〔展覧会企画運営〕

ルーヴル美術館展——17世紀ヨーロッパ絵画、国立西洋美術館、2009年2月28日-6月14日

〔著書〕

『ルーヴル美術館展——17世紀ヨーロッパ絵画』カタログ

〔論文〕

「江戸のゼウクシス:写実をめぐる日蘭交流」『ルーヴル美術館展——17世紀ヨーロッパ絵画』カタログ、pp.53-63

〔翻訳〕

『ルーヴル美術館展——17世紀ヨーロッパ絵画』カタログ(共訳)

〔講演〕

「偽りの風景:ヤン・ボトの失墜と復活」、関西大学、2008年10月

〔教育〕

金沢美術工芸大学非常勤講師

お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師

〔調査研究〕

科学研究費基盤研究(B)海外学術調査「レンブラントおよびレンブラント派における和紙による版画素描作品の研究」(研究代表者)

「レンブラント:光の画家」(2011年開催予定)のための準備

〔その他〕

お茶の水女子大学文学博士論文審査委員

新潟県立近代美術館作品収集委員

鹿島美術財団推薦委員

佐藤直樹 Naoki SATO

〔展覧会企画〕

「ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情」企画・構成・監修、2008年9月30日-12月7日開催(ロンドン、ロイヤル・アカデミー:2008年6月24日-9月7日)

「デューラー版画素描展」(仮称)企画・構成・監修、2010年10月26日-2011年1月16日開催予定

〔調査研究活動〕

『ヴィルヘルム・ハンマースホイ——静かなる詩情』展カタログ、佐藤直樹/フェリックス・クレマー編、国立西洋美術館、2008年

(英語版)Felix Krämer, Naoki Sato and Anne-Birgitte Fonsmark, *Hammershoi*, Royal Academy of Art, London, 2008 *同じく独語・仏語版あり

「物語のない日常——ハンマースホイとオランダ17世紀の室内画を隔てるものと結びつけるもの」『ヴィルヘルム・ハンマースホイ』展カタログ、佐藤直樹/フェリックス・クレマー編、国立西洋美術館、2008年、pp.33-37

(英語版)The Quotidian View without Narrative, Connections and Separations between the Interior Paintings of Vilhelm Hammershoi and Seventeenth-century Dutch Interior Paintings, in: *Vilhelm Hammershoi*, by Felix Krämer, Naoki Sato and Anne-Birgitte Fonsmark, The Royal Academy of Arts, London, pp.39-45 *同じく独語・仏語版あり

第21回 国際版画素描学芸員会議、パネルディスカッション発表、「版画素描の研究の新たな方法をめぐって」2008年6月16日、ドレスデン版画素描館講堂

Symposium "Graphic art collection today", International Advisory Committee of Keepers of Public Collections of Graphic Art, XXIIth. Convention at Dresden, 15-19 June 2008

アルス・ウナ芸術研究会主催、東京藝術大学教授越宏一氏講演会「デューラーのなかの中世」における司会、東京大学駒場校舎、2008年11月26日

平成19年度-20年度科学研究費(基盤研究(A)一般)「19世紀西欧における「ラファエッロ以前」問題の研究」17世紀のデューラー・リバイバルについて(研究代表者:一橋大学教授 喜多崎 親)

国立西洋美術館50周年記念『名作選』英語版 "Masterpieces of the National Museum of Western Art, Tokyo"の出版準備と英訳校正(2009年出版予定)

〔普及活動〕

「日経丸の内キャリア塾ARTクラブ ヴィルヘルム・ハンマースホイ展」講演、国立西洋美術館講堂、2008年10月9日

「ヴィルヘルム・ハンマースホイ展のみどころ」スライドトーク、国立西洋美術館講堂、2008年10月10日、24日

NHK新日曜美術館「ヴィルヘルム・ハンマースホイ」出演、NHK、2008年11月17日放映

「これまでにない美術展を目指して」『文部科学時報』6月号、No.1589、2008年、p.59

「ブリュッセルと芸術 イタリア・ルネサンスへの反乱」オーストリア航空機内誌「一望千里」第3号、2008年7月30日

「ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情」『うえの』No.594、2008年10月号、pp.31-33

「北欧のフェルメール? 忘れ去られた天才画家ヴィルヘルム・ハンマースホイ」『美術の窓』No.301、2008年10月号、pp.109-112

「静かなる詩情 ヴィルヘルム・ハンマースホイ」『月刊美術』2008年10月号、pp.96-102

〔研究企画室の活動〕

2007年度国立西洋美術館年報No.42の編集

展覧会企画計画の調整

インターンの採用の調整

客員研究員採用の調整

海外出張の調整

〔査読委員〕

『美術史』美術史学会編、第164冊、査読委員、2008年

〔教育活動〕

東京藝術大学美術学部芸術学科、特講演習「国立西洋美術館の作品調査研究」2008年4月－2009年8月

上智大学ドイツ文学科、ドイツ文学特講「アルブレヒト・デューラーの芸術」2008年9月－2009年3月

陳岡めぐみ／Megumi JINGAOKA

〔展覧会企画〕

「コロ 光と追憶の変奏曲」展、2008年6月14日－8月31日

「国立美術館五館共同展」(仮称)、2010年開催予定

〔執筆活動〕

論文等：

「松方コレクションとコロ」『コロ 光と追憶の変奏曲』展カタログ
作品解説、上記カタログ

翻訳：

『コロ 光と追憶の変奏曲』展カタログ、エッセイほか

『ルーヴル美術館展——17世紀ヨーロッパ絵画』カタログ、エッセイほか

〔調査研究活動〕

平成18－20年度科学研究費若手(B)「芸術遺産／資本の表象——19世紀仏の挿絵入り美術出版物に関する調査研究」

〔教育活動〕

ボランティア研修講義「国立西洋美術館の所蔵品について——19世紀編」国立西洋美術館、2008年11月14日

〔普及活動〕

一般への講演等：

先生のための鑑賞プログラム「コロ 光と追憶の変奏曲」展、国立西洋美術館、2008年6月27日

日本経営クラブ講演「ルーヴル美術館展——17世紀ヨーロッパ絵画」国立西洋美術館、2009年3月13日

雑誌記事等：

「コロ 光と追憶の変奏曲」展：『新美術新聞』2008年1153号、『うえの』2008年6月号、『ゼフェロス』2008年35号、『毎日が発見』2008年6月号、『文化庁月報』2008年6月号、『美術の窓』2008年6月号、『芸術新潮』2008年6月号、読売新聞「美術館・博物館情報」2008年7月15日付ほか3回、「特集記事」2008年7月23日朝刊、『読売ウィークリー』『YW Gallery』2008年6月22日号以下3回

「ルーヴル美術館展——17世紀ヨーロッパ絵画」：『うえの』2009年3月号

来館者案内：

「コロ 光と追憶の変奏曲」展、皇后陛下、2008年8月13日

〔社会貢献〕

各種委員会委員等：東大比較文学会書評委員

新藤 淳／Atsushi SHINFUJI

〔研究活動〕

展覧会準備：

所蔵版画展、2009年7月7日－8月16日開催予定

作品鑑賞ガイドに関する調査研究：

文化庁委託業務「美術展示物の鑑賞を助ける音声・映像案内の高度化にかかる調査研究事業」、iPod touchを用いた常設展鑑賞ガイド「Touch the museum」の企画(実証実験：2009年2月9-14日)

編集協力：

『ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情』展カタログ、国立西洋美術館、2008年

論文：

「横顔のアイコン——宗教改革前夜におけるキリストの『肖像』について」『国立西洋美術館研究紀要』No.13、pp.5-27

高梨光正／Mitsumasa TAKANASHI

〔論文〕

“Apoteosi del Tatto - Correggio e Mario Equicola”, in *L'Arte erotica del Rinascimento*, Atti del colloquio internazionale, Tokyo 2008, a cura di Michiaki Koshikawa, pp.29-36

〔調査活動〕

収蔵作品調査等：

個人蔵田松方コレクションの15～18世紀イタリア絵画および素描(テンペラ板絵3点および素描17点)の来歴調査および作者同定を含む美術史的調査

ディルク・バウツ派《荊冠のキリスト》(P.1980-0003)および《悲しみの聖母》の調査復元

2008年度科学研究費補助金(基盤研究(C))、題目「15～17世紀バルマ派美術の歴史的再構築に関する調査研究」(研究代表者)

〔展覧会調査〕

古代ローマ帝国の遺産展(2008年9月19日－12月13日開催)準備

〔その他〕

国立西洋美術館新館改修工事

イギリス、ギャルビン楽器学協会員

日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会員

寺島洋子／Yoko TERASHIMA

〔教育普及活動〕

「Fun with Collection見る楽しみ・知る喜び——宗教・芸術家・修復編」企画・構成・実施、2008年7月1日－8月31日

「コロ展」ジュニア・パスポート

インターンシップ・プログラム指導

ボランティア・プログラム指導

小・中学校教員のための夏期研修会の企画・実施

ファミリープログラム企画・実施

平成20年度 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修、東京国立近代美術館、2008年7月28-30日

〔調査・研究活動〕

「ル・コルビュジェと国立西洋美術館」展作品および資料調査
短期在外研究「高齢者プログラム調査」ロンドン、2008年3月3日－
2009年5月2日

2008年度科学研究費（基盤研究B）「国立西洋美術館を中心とした
ル・コルビュジェ作品の文化遺産保存活用に関する調査研究」、
2009年11月16-23日

〔雑誌等〕

「スクール・ギャラリートーク」『教育美術』No.797、2008年11月、
pp.26-27

〔口頭発表〕

「西洋美術の楽しみ方」浩志会（株式会社損保ジャパン）、2008年5
月28日

〔その他〕

全国美術館会議会合共同企画および実施：第33回会合、2008年8
月28日、29日

東京大学人文社会系研究科併任准教授、2008年4月－2009年3月

武蔵野美術大学通信教育課程「造形ファイル」外部評価委員、2006
年11月1日－2009年3月31日

財団法人日本海事科学振興財団評議員、2006年10月1日－2010年9
月30日

村上博哉／Hiroya MURAKAMI

〔訳書〕

ジェイムズ・クノー編『美術館は誰のものか 美術館と市民の信託』
（共訳）ブリュッケ、2008年10月

〔講演〕

「松本竣介が描いた東京」、2008年9月27日、ブリヂストン美術館土
曜講座

〔その他〕

東京大学大学院非常勤講師（文化資源学）

全国美術館会議企画担当幹事

文化庁「美術品等の貸借に係る諸課題に関する調査研究協力者
会議ワーキング・グループ」委員

世田谷区文化施設指定管理者選定委員

『美術史』査読委員

横山佐紀／Saki YOKOYAMA

〔展覧会関係教育普及活動〕

ウルビーノのヴィーナス展：講演会実施、先生のための鑑賞プロ
グラム実施、学校団体向けオリエンテーション

コロ展：講演会実施、先生のための鑑賞プログラム実施、作品和
文リスト、作品英文リスト、会場作品解説パネル、会場用作品解説パ
ネル拡大文字版制作、障がい者のための特別鑑賞プログラム実施
（協力：三菱商事）、学校団体・教員向けオリエンテーション

ハンマースホイ展：講演会実施、先生のための鑑賞プログラム実
施、作品和文リスト、作品英文リスト、会場作品解説パネル、会場用
作品解説パネル拡大文字版制作、団体向けオリエンテーション

ルーヴル美術館展：講演会実施、作品和文リスト、作品英文リスト、
会場作品解説パネル、会場用作品解説パネル拡大文字版制作

〔調査・研究活動〕

全日本博物館学会参加、明治大学、2008年6月15日

全国美術館会議教育普及部会参加、目黒区美術館、2007年8月28
日、29日

ナショナル・ポートレート・ギャラリー（ワシントンDC）Museum Blog
インタビュー取材対応（10月）および寄稿（11月）

ナショナル・ポートレート・ギャラリー、ナショナル・ギャラリー（ロンド
ン）訪問・調査（教育プログラム）、2009年1月15-23日

〔その他〕

FUN DAY 2008 企画・実施、2008年9月20日、21日

OPEN museum プロジェクト準備

50周年記念事業オーラル・ヒストリー

執筆：

『ゼフュロス』No.35「Fun with Collection 2008年7月～8月 見る楽し
み・知る喜び——宗教・芸術家・修復編」

『文部科学時報』「他機関との協力の機会を開くために」（平成20年
4月号）

『文化庁月報』7月号「イベント案内」Fun with Collection 2008につ
いて

取材対応：

『東京大学新聞』西洋美術館紹介記事

美術館.com

渡辺晋輔／Shinsuke WATANABE

〔翻訳〕

ファブリツィオ・パオルッチ「15-18世紀におけるメディチ家の古代コ
レクション」『国立西洋美術館研究紀要』No.13, pp.29-38

〔講演〕

「ルネサンス美術に表わされたヴィーナス——《ウルビーノのヴィー
ナス》を中心として」2008年5月10日、国立西洋美術館講堂

〔教育活動〕

武蔵野美術大学版画研究室特別講義、2008年10月

〔その他〕

カポディモンテ美術館展（2010年開催予定）の準備

国立西洋美術館報 No.43

編集発行 — 国立西洋美術館 / 2010年3月31日

制作 — コギト

印刷 — 猪瀬印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN OF THE NATIONAL MUSEUM OF WESTERN ART
No. 43 (April 2008 - March 2009)

Published by National Museum of Western Art, Tokyo March 31, 2010

©National Museum of Western Art, Tokyo, 2010
Printed in Japan

ISSN 0919-0872

[付記]

本号より『国立西洋美術館年報』改め『国立西洋美術館報』となった。
なお、英語の表記はこれまでと変わらない。



The National Museum of Western Art